
Sirius

月宮紫苑

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S i r i u s

【Nコード】

N 2 1 7 7 Y

【作者名】

月宮紫苑

【あらすじ】

白銀の町、『シルバーパレス』に生まれた漆黒の髪と目をもつ少年、シリウスの物語。

登場人物紹介？

シリウス・エーデル

Level 1

歳 14

家柄 エーデル公爵家

主人公。 黒髪、 黒目の整った容姿をもつ。 非常に賢く、アビリティ国立第一学校では1学年主席を誇る。運動がかなり不得意（魔法による身体能力強化で対策している）。魔法はかなりの腕前。レーラを溺愛している。アレンとは親友（幼なじみ）。

アレン・ラインフォード

Level 1

歳 14

家柄 ラインフォード男爵家

焦げ茶色の髪に金色の瞳をもつ。成績は平均的。しかし、身体能力に優れており、魔法を使ったシリウスにも引けをとらない。シリウスの親友（幼なじみ）。

レーラ・エーデル

Level 1

歳 13

家柄 エーデル公爵家

シリウスの妹。 兄と同じ黒髪、黒目の美少女。 優しく、素直な

性格。だが本質的には兄とよく似ている。魔法が得意でかなり賢い。しかし、一般常識が欠落している部分がある。

ヴィンセント・エーデル

Level 1

歳 ??

家柄 エーデル公爵家

エーデル公爵家当主。シリウスとレーラの父。普段は優しく、家族思い。しかし、貴族としての顔は厳しく、敵に対して決して温情をかけない、冷酷な一面をもつ。

アリア・ジエベール

Level 1

歳 24

家柄 ジエベール子爵家

若くしてエーデル公爵家のメイド長。それだけあってかなりの知能と魔法力を持っている。つなに冷静沈着な性格で、幼い頃からエーデル家に仕えているため、ヴィンセントへの忠誠心は高い。シリウスとレーラのことを気にかけている。

第1話 白銀の町と真っ黒な瞳

『本当によろしいのですか？』

『あの御方の決めたことです…。それにこの子にとってはその時
がくるまでまで知らぬ方が良いでしょう……。約束してください。
い。しかるべき時がくるまでこの子を守ってくださいと。そし
てこの子に相応しき知識を与えてくださると。』

深夜に真っ黒なマントを羽織った男女がヒソヒソと声を潜めて如何
にも深刻そうな声音で話していた。

『……引き受けましょう。』

この身に代えてもお守りしてみせます。』

『ありがとう……。なんとお礼を言つて良いか……。』

『……それよりも、これから貴女はどうなさるのですか？』

『……私はこの町から出て、何処か静かな場所で暮らしていきた
いと考えています。』

『しかし……。貴女ほどの方がこの白銀の町を出ていくなど。
わかつておいでなのですか？』

『僅かな例外はありますが……。私でなくても1度この町を出た
ら簡単に戻ることができないくらい、承知していますわ。』

最後の方だけ少し自嘲ぎみな声音だった。

『ならば何故ですか。貴女は貴重な戦力だ。これからのこの町
には必要な人材のほずです！』

『……ありがとう。でも私ではもう役には立てないわ。この身体
に残された時間はあまりにも短すぎる。』

『……まさかッ！』

『いいですね。 エーデル。 この子の力はいずれ必ず必要になります。 貴方はこの子を正しき道へ導いてください。 …ああ、もう行かなければ。 さようなら、 エーデル。』

女が手をひとふりすると、 エーデルの意識は闇に飲まれた。

倒れたエーデルの腕の中に赤子がいた。 漆黒の目が女の瞳をみつめている。

『さようなら。 シリウス……。』

女は優しい笑みを浮かべてシリウスにキスした。

しばらくシリウスを見つめていたが、 最後にもう一度悲しげに微笑むと、その姿は一瞬にして消えてしまった。

第2話 シリウスの日常

『………… 我々魔法使いは古くからこの国の発展に力をそそいできたのです。』

ここはこの国一番の名門校。

国立アビリティ第一学校1年生の教室。 女王陛下に優秀と認められた者、 もしくは優秀な家柄の者しか入学を許さないエリート中のエリートの学校。

『ミスター・エーデル。 我ら魔法使いが何故このシルバーパレスとドラゴンパレスにしか存在しないのか、理由を述べなさい。』

指名されて、答えているのは漆黒のつややかな髪と目を持ち、 10人とすれ違えば10人が振り返るであろう美貌の少年。
絹のようになめらかで真っ白な肌に、 瞳にはやや憂鬱そうな光がやどっている。

そして、 胸には学年主席を表す銀のバッチが光っていた。

『我らがこの町とドラゴンパレスにしか存在しない理由は、 外界の人間との思考の違いによるからです。 我らは選ばれた存在であり、 その才能を十分に生かしていく必要があります…………』

少年——シリウスは教師の期待通りの答えをよどみなく上げていく。

『したがって我ら魔法使いと外界に住む一般人は能力が違いすぎるため、 互いに干渉し過ぎないようにするためです。』

教師が満足げに頷き、

シリウスは席に座った。

『シリウス、さすがだな！前回のテストでもぶっちぎりの1位だったし。』

『べつに……。あんなもの、将来なんの役にたつんだ。あんなものより呪文の1つを覚えた方がずっと有意義だ。』

『まあ、そうかもしれないけど……ってお前、そんなことっておいて授業はずいぶん完璧だったじゃないか？』

『当たり前だろう。あの教科をきちんとしておけばそれだけで模範的な生徒としてみなしてくれるからな。』

『……。』

『どうしたんだ。アレン。』

『いや、名門エーデル公爵家のお坊っちゃまには全く見えない発言だと思ってな。』

『嫌みか？はっ。別に普段は扱いやすい優等生を演じているだけだ。』

『お前って……。本当にひねくれてるよなあ。少しは素直になれば良いのに。』

『無理。』

『いや、そんな笑顔で言われても……。』

つくづく徳な顔だよなと思う。

こんな話をしているのに、はたからみたら、単に親しげに話しているようにしかみえない。

『えっと。シリウス君！』

ほら、また来た。

にっこりと天使の微笑みを浮かべる悪魔。

『俺に何か用かな？』

こんどは告白か、それともデートのお誘いか。

『こんどの休暇かな？もし良ければうちの家でパーティーをするの。よかったらシリウス君もどうか？あつ、アレン君も。』

真っ赤になりながらいう少女。

確か彼女はどこぞの子爵家の令嬢だったか。

『ごめんね。休暇の予定はすでに入れてあつて……』

本当に申し訳無さそうな声音でいう。

『僕も予定があつて……。ゴメン。』

『そつか……。じゃあ、2人とも休暇を楽しんできてね。』

がっかりして帰っていく女生徒。

『……断つて良かったのか？今のやつ、たしか子爵家のご令嬢だろ？』

『ああ。ハント子爵家のな。』

『……答えてないぞ。』

『1人に付き合つと全員と付き合うハメになる。お前は俺に死ねと言いたいのか。』

たしかにシリウスにはこういう「お誘い」が日に10件はくる。

いちいちかまっていられないだろう。

『まあ、それはそうだが…。』

『そんなに行きたいならお前だって行けば良いだろう。』

嫌だ。何が悲しくてシリウス目当てのパーティーに俺が参加しないといけないんだ。

『まあ、そんなことよりアレン。午後は呪文の練習をするぞ。』

『令嬢の誘いをそんなことか……。まあ、俺も勉強はお前とやった方が効率良いしな。』

『決まりだな。じゃあ、午後は瞬間移動の呪文を練習する。』

『っ！！聞き間違いだよね！？俺たちまだ1年だよ！？瞬間移動の呪文は5年までならわないぞ！』

『大丈夫だ。俺に出来ないことはない。』

天使の顔で、このうえなく傲慢な発言をする少年、シリウス。アレンはこの少年と親友となったことを若干後悔しつつ、地獄の呪文練習に付き合うのだった。

第3話 パーティーの夜

ここは、アビリティ帝国の首都、『シルバーパレス』。
白銀に輝く、この国1美しいとたたわれる、選ばれた者の住ま
う町。

そしてこの国には、貴族の爵位とは別に、生まれた時に人間を
選別する制度があった。

Levelは1〜10まで。

数字が0に近づくほど、その人間が優秀ということである。
この数字は公表されるものではないが、このシルバーパレスには
Level 12以上の人間しか入ることは許されない。

他にも様々な法があり、この国の人間を縛っていた。

『シリウス様。シリウス様は何か好きな物がありますか？』

『シリウス様、今度は非我が家に遊びに来てくださいませ。』

『シリウス様、私とダンスを踊りませんか？』

『…………。』

ああ、鬱陶しいっ！！

わかっていた。パーティーに来ればこうなるということとは。し
かししょうがないではないか！

『シリウス兄様。 今度私の友人が開くパーティーに、 一緒に出席してくれませんか？』

『珍しいな。 レーラがパーティーに行くなんて。』

何でも、 レーラは断りたかったが、 その友人は有力な侯爵家の令嬢で、 断りきれなかったらしい。

そして、 シリウスが溺愛する妹の頼みを断れるはずもなく、 今に至る。

『ゴメンなさい…。 アレン。』

『いや、 良いよ。 俺も久しぶりのパーティーで楽しめたし。』

非常に申し訳無さそうな声音でいうレーラ。

こちらは兄と違って本心だろう。

兄ととてもよく似た容姿をもつ絶世の美少女。

艶やかな黒髪に漆黒の目。 そして真っ白でなめらかな肌。

『それよりもいいのか？ まだレーラと話したい人は山ほどいるみたいけど…。』

『流石に今日はもう疲れました…。』

かれこれ2時間以上も談笑していた（演じていた）らしい。

『それより、 アレンはどうなんですか？ アレンと話したがっている人だっていますよ？』

たしかにアレンの容姿は悪くない。

癖のある焦げ茶色の髪に、透き通る様に綺麗な金色の瞳。普段、シリウスの陰に隠れているが、アレンもそれなりに整った容姿をしている。

『良いんだよ。俺は。シリウスに任せておけば。』
どうせ、家の自慢話しか聞かされないし。』

ちなみにアレンの家、ラインフォード家は男爵位である。

『あつ。兄様が逃げました。』

『ご令嬢が追いかけてきた……ってなんであいつはこっちにくるんだ
……！』

急いで逃げようとしたが、間に合わなかった。
珍しく髪を乱したシリウスは必死の形相でいった。

『レーラっ！ 悪いが一緒にダンスを踊ってくれないかっ！？』

あとで理由を聞くと、この時シリウスは10名ほどの女性にダンスを迫られていたらしい。

第4話 パーティーの夜2

『助かったよ。 レーラ、 本当に。』

『兄様も大変でしたね…。』

今、 シリウス、 アレン、 レーラはパーティー会場の城の庭で夜風にあたっている。

『……というか、 アレン。 お前が逃げ回っているから、 お前の分まで俺が引き受ける羽目になったんだぞ。』

『あつ。 やっぱり気づいてたんだ。』

『当たり前だろうっ!!』

アレンは、 ご令嬢方がやってくるなり、 全員、 シリウスに押し付けてしまったのである。

『でもさ、 シリウス。 女の子達も喜んでたよ？ 未来の公爵様とお話できて。 それに、 俺は無理やり連れてこられたんだし。』
『っ!!』

（ああ。 アレン、 今日は何か予定あるか？）

（いや、 とくにないけど？）

（丁度よかった。 今日、 お前の家に迎えにいくからな。）

（は？）

（いや、 レーラの友人の家に行くんだが、 その友人が俺とお前にも是非来てほしいと言っていたらしいんだ。）

（珍しいな。 お前が他の家に行くなんて。）

（レーラの友人だからな。 お前もきちんとした格好にしておけよ。）

（しょうがないな……。 わかったよ。 じゃあ、 また後でな。）

（ああ、 また後でな。）

『パーティーが開かれるなんてきてなかったなあ。 俺は。 あの会話の流れじゃあ、 誰だって少しお邪魔するだけだと思うんじゃないか？』

『はつ。 俺は嘘は言っていないぞ。』

あ、開き直った。

たしかに嘘は言っていない。 さっしの良い人ならばあの会話でシリウスの本音を見抜けたかもしれない。

つまり、 アレンはシリウスの笑顔にすっかり騙されてしまったのである。

長年一緒にいる自分でさえこれだから、 シリウスを初めて見る人間がすっかり騙されてしまうのは当然のことかもしれない。

『ふん……。』

シリウスも夜風にあたり、 気分が落ち着いてきたみたいだ。

『どうしますか？ 一応こちらのご当主様に挨拶もいたしましたし……。』

『そうだな……。』

『うん。 それじゃあ、 今日はお開きかな？』

そんな会話をしている時だった。
突然城の方から闇を切り裂くような悲鳴が聞こえた。

これまで見たことの無い装備。そして全員が深紅のマントを着ている。そのマントには黒い鳥のような紋章が入っていた。

『シリウス兄様っ！！もう味方の障壁がもちませんっ！！』

『もう少して応援がくるはずだっ！！』

……我が命に応えよ……吹雪の女王よ……契約に従い我が敵を打ち滅ぼせ……コールド・インスピレーションっ！！』

冷気が敵を一瞬で凍りつかせた。

『！！流石ですっ！！シリウス兄様！』

『……待て、レーラッ！！』

敵の氷が、みるみるうちに溶けていき、再生してしまった。

『くっ！！』

『シリウス、何か対策はないのか！？』

『言われなくてもわかってるっ！！』

この敵は魔法がほとんど効かない。逃げるという手もあるが、それでは町に被害が及ぶかもしれない。

瞬間移動や飛行の呪文は上級呪文の1つで、魔力を大量に消費した今は魔力を集中するのに時間がかかる。何よりこの魔法は使える人数が少なすぎる。

『兄様っ！！障壁がっ！！』

『シリウスっ！！』

『……アレン。　レーラを頼む。　瞬間移動は無理でも飛行は出来るだろう?』

『ッ!?　兄様はどうなさるのですかッ!?』

『俺は残るよ。　まだ魔力がもつし、　魔法が使えない人も残っているから。　それに俺は時期公爵として皆を守らないと。』

『では、　私ものこりますッ!』

『だめだ。　アレン…頼む。』

『…わかった。　……気をつけてな。　シリウス。』

『はっ。　誰に向かって口をきいている。　俺が負けるはずないだろう。』

『嫌です…。　私だけ避難するなんて……。ッ。』

『レーラ、　この場に俺たちがいてもシリウスの邪魔になるだけだ。』

『……ッ!』

『また後でな。　シリウス。』

『ああ、　また後で。』

その言葉を最後にアレンとレーラは空高くに飛び去っていった。

シリウスは敵と戦っていた。　応援もきたが、　全く形勢は変わらない。

『くっ……。!』

しかし、何となくだわかってきたこともある。この敵はあきらかに何か、もしくは誰かを探している。この敵の目的が殺戮だったなら、おそらく自分達はとくに全滅している。敵と自分達にはそれほどまでの実力差があった。

『……くッ!』

防御が間に合わず、足に呪文が当たってしまい、床に倒れてしまった。

急いで反撃しようと呪文を唱えたが、それよりも速く敵の呪文が襲ってきた。

深紅の閃光がシリウスの胸を貫いた。

第6話 パーティー、閉幕2

不思議な感覚だった。

確かに貫かれたはずなのに、痛みすらない。

何も考えられない。

ただ、理解できるのは今、自分を支配しているのは純粹な怒りだということ。濃密な魔法のオーラがシリウスを包みこんでいく。

『貴様らごときが、この私に刃をむけるのか……………っ！！！』

自分の身体が勝手に動いている。

『やはりっ！！』

『ここにいたのかっ！ 死に損ないめがっ！！』

『貴様のでる幕などないわっ！ 死ね！！』

敵が自分に向けて何か言っているが何も聞こえない。ただ、わかっていてるのは、もうこの場には自分と敵しかおらず、自分はこの敵を滅ぼさなければならぬということ。

『己の罪を悔やむがよい……。ダークネス・インスピレーションッ！！！』

その瞬間、一瞬、全ての光を闇がのみこんだ。そして次にシリウスが目にしたのは、傷もなく、さっきまでと

何ら変わらない敵。それが一気に倒れ伏した。その全てが顔に
紛れもない恐怖を浮かべ、死んでいた。

シリウスはそれを見て、狂ったように笑い続けていた。

自分が何をして、何を感じているのかすらもわからないまま。

第7話 その後

『……………？』

『……………あつ、旦那様！　レーラ様！　シリウス様がお目覚めになりましたっ！！』

自分の顔を見るなり叫びながら部屋を出ていくメイド。
それで意識が覚醒した。

ここは自分の部屋だ。

シリウスがそれを認識するのにたつぷり30秒はかかった。
何故だろうか。　ひどく懐かしく感じる。

『シリウス兄様っ！！　ご無事で本当に良かった……………。』
部屋に入るなり、　レーラは自分に抱きついていた。

『大丈夫か？　シリウス。』

目覚めたからといって無茶をするんじゃないぞ。　しばらくは身体を
休めなさい。　学校にも連絡しておこう。』

苦笑しながらレーラの後から入ってきたのは、　父、ヴィンセント・
エーデル。　黒髪に金色の目の美しい容姿をもち、
相変わらず、　とても40手前には見えない。

『父上…。そんな大袈裟な…。
私は大丈夫ですから。』

自然と顔が綻んだ。

『なにを言う。1週間も寝込んでおいて。』

『1週間！？』

流石に啞然とした。

通りで自分の部屋に懐かしさを感じるわけか。

『そうです、1週間です、兄様。だからしばらくは休んでいただけますね？ 私も父様も心配したんですから……。』

泣きそうな表情でレーラに迫られては反論出来ない。

『まあ、たまにはいいだろう？ ああ、そうだ、後で食事を持ってこさせよう。』

そこで初めて自分が空腹な事に気づいた。

『それまでは、本でも読んでいることだな。間違っても呪文の練習などするんじゃないぞ？』

苦笑するしかない。見抜かれていたらしい。

呪文の練習は魔力の消耗が激しい。病み上がりにするものではないが、正直な話、シリウスの魔力と体力はすでに回復していた。

『いや、父上。私の魔力はもう回復してಿದೆすね…』

『大丈夫です。父様。私が兄様を見張っておきますから。』

天使の笑顔とともにレーラがだめ押しした。

『レーラ…………。』

『ああ、頼んだぞ。レーラ。』

ヴィンセントは笑いながら部屋を後にした。

（ああ、気持ち悪い。）

レーラとヴィンセントが部屋を出ていった後。

シリウスはあの夜の事を思い出していた。

自分が自分ではないように身体が動き、それまでは見たことすらなかった最上級の闇の呪文を容易く扱っていた自分。自分の中に、自分ではない者がいるような感覚。

恐怖もあるが、それ以上に気持ち悪かった。

そして、今あの夜の事を思い出して見ると、敵は十中八九、自分の事を狙っていたのだらう。

敵は自分に何かを喚いていた。

そんなセリフを言われる様な事は身に覚えがない。公爵家に恨みのある者たちの仕業かとも思ったが、それならば、レーラが逃げるのを許さないはず。

敵は、自分だけに用があつたのだ。

シリウスは長い間考えていた。

この事は父に言った方が良いかも知れない。

敵が普通の魔法使いならば良い。

自分の周りにはLevel2以上の優秀な魔法使いが沢山いる。

しかし、あの敵はLevel1の者も沢山いた場で殆どの者を殺戮しつくした。

自分1人で解決出来る問題ではない。

シリウスは決断した。

父に全て話す事を。

……自分が起こった事を除いて。

第8話 ロストタウン

ここはシルバーパレスより南に20kmほど離れた場所。
ロストタウン。

生まれた時に「劣悪」とされた者たちが集まる場所。

住んでいる住人も皆みすばらしい格好をしている。ここにはシルバーパレスの様に魔法使いなど存在せず、満足な医療機関すらない。

そのロストタウンの地下深く。ざっと30人程であろうか。赤いマントを羽織った人間達が1人の少女にむかって跪いていた。

『…………では、シルバーパレスに行っていた仲間達は、皆死んでしまったのね…………。』

『…………そのようです。申し訳ありません、シエラ様…………。』

シエラと呼ばれた少女は、白銀に輝く髪に、漆黒の目、1度も目に当たったことが無いような真っ白な肌、全てが整った顔立ちをしていた。

『良いのです。しかし、あやつが目覚める前に倒さねばなりません。シルバー、ドラゴン、クリスタル、サファイア、アクア。この国の5大都市を我らの手に取り戻すのです。』

『……封印するのですか？』

『……今の私達にはあやつを滅ぼすことは不可能です。先の戦いで我らは力の半分を失ってしまいました。しかし、あやつも身体を滅ぼせば少しの間ですが、時間を稼げるでしょう。』

『今あやつを縛っている封印が解ける前に新たに封印しなければなりません。』

『……承知いたしました。』

そこでシエラは微笑んだ。それはまるで聖母のように清らかな笑みだった。

『皆さんに私の祝福を授けましょう。』

我が命に従い、我が敵を射ち滅ぼしなさい。』

『シエラ様は「あの人」を本気で封印するつもりなのでしょう……』

『本気でしよう…。わかっていると思うけどベラ、私達の主はシエラ様よ。』

シルバーパレスの王者はシエラ様ただ一人よ。あの人ではないわ。』

『わかっているわよ。』

ベラと呼ばれた少女は少し憤慨したように言った。

『ただ、私はシエラ様が「あの人」を…。』

『その先は禁句よ。……ああ、そういえば私はアクアパレスに行くことになったの。だから暫くは会えないわよ。』
『えっ！ ユーリも！？』

ユーリと呼ばれた女性は少し悲しげに言った。

『シエラ様の命が下ったわ。あの場所も封印し直さなければなら
ないから。』

『……』

『そんな顔しないで。今回はそんなに危険な役目じゃないの。
あの場所に封印を阻む結界があるからそれを壊すだけよ？』

ユーリは笑って言ったが、ベラの気持ちは晴れなかった。

結界を壊すだけと言っても、それは封印する人よりも町の奥には
入らないため、危険が少ないと言うだけだ。それにこの結界は
普通の結界ではない。

それでもベラは笑顔を浮かべて見せた。

きつとユーリの方が不安と恐怖でいっぱいだったはずだから。

『うん。それなら少しは安心かな。頑張ってきて！！』

……それに、私達がシエラ様に逆らうことは出来ないから。
絶対に。

町の紹介？（前書き）

この説明は見なくても問題ありませんので興味のある人だけ見てくだ
さい（笑）？

町の紹介？

シルバーパレス

Level 12以上の者しか入ることを許されない（奴隷や使用人は別だが、主人の屋敷以外は出歩けない）。住んでいる住人は2/3程が魔法使い。残りの住人も頭脳や身体能力が優れている者ばかりで、きらびやかな印象を受ける。

アビリティ帝国の首都で白銀に輝くこの国1美しい町。女王陛下が住んでいる城と、この国を創ったとされる神を祀る神殿がある（王族はこの血をひいていとされている）。町と外界を隔てる城壁がある（町に入るための入り口は1つしか存在しない）。

ドラゴンパレス

Level 13以上の者しか入ることを許さない。

神殿があり、魔法使いよりも技術者や科学者が多い。シルバーパレスの北に位置する町。この国で第2の大きさを誇る。町と外界を隔てる壁が存在する。

クリスタルパレス

Level 13以上の者しか入れない。名前の通り、ガラスで作った物が沢山存在する。この町の神殿は、5大都市の中でもかなりの大きさと美しさを誇る。

シルバーパレスの北西に位置する町。

町と外界を隔てる壁が存在する。

サファイアパレス

Level 15以上の者しか入れない。この町の名前は、周辺の土地から宝石や魔法石が沢山とれるため。この町には宝石の店が数多くある。そのため、多くの技術者達がこの町に住んでいる。この町の神殿には数多くの宝石や魔法石の装飾品が飾られており、見るものを圧倒させる。シルバーパレスの西に位置する。町と外界を隔てる壁が存在する。

アクアパレス

Level 15以上の者しか入れない。名前通りの水の都。外国との貿易が盛んで、この国の繁栄を象徴している町。この町での移動は主に船を使う（運河が全ての道を繋いでいるため）。町の中央の中央湖には神殿が浮かんでいる。水に映る神殿と町並みが大変美しいと評判の町。シルバーパレスの南東に位置する。町と外界を隔てる壁がある（港側には存在しない）。

ロストタウン

生まれたときにLevel 18以下とされた者たちが住んでいる町。満足な医療機関もなく、魔法使いも存在しないため、病気が蔓延しやすい。そのため、町には活気がなく、さびれている。

シルバーパレスの南に存在する小さな町。

第9話 夢幻の対面

『レーラ様、 兄君はご無事でしたか？』

『療養しているとお聞きしていますが…。』

『テロに巻き込まれたとか…。』

ここはシルバーパレスにある、 女学院。 名門、 私立リリウム女学院。

毎年数多くの国立学校合格者を輩出する名門中の名門校である。

比較的、 貴族が多く、 お上品な印象を持たれることが多い学校だが、 噂話が好きな所は、 他の学校となんら変わらないとレーラは思う。

兄のことや、 自らもテロの現場にいたせいか、 次々に質問が浴びせられる。 もう、 最初の質問なんて忘れてしまった。

『皆様。 兄は来週から学校に行けるそうなので、 もう大丈夫ですわ。』

につこり微笑んで、 女生徒達の口を封じる。

昔からこういう事が多かったレーラは、 笑顔が相手の口をふさぐ、 最良の武器だということを知っている。

『まあ、そうでしたの…。』
『レーラ様が言うのなら…。』

すぐすごと引き下がっていく女生徒達。

おそらくこの1週間はこんな調子だろう。

レーラは密かにため息をついた。

リリウム女学院の生徒は、基本的に寮で暮らす。レーラの様に自宅から通う生徒は少数派にすぎない。それでも、校門に続く道には沢山の生徒がいた。全員が真っ白な生地のワンピースに黒のベルトというこの学校の制服を着用していた。

だからだろうか。

レーラは自分の前方に立っている少女に目を奪われた。

白銀に輝く髪が風になびいている。真っ白な肌に豪華な薄い金色

のドレスを着ている少女だった。

そんなとても目立つ格好をしているのに自分以外の人間は、誰も、この少女に気がついていない様だった。

その少女は自分にむかって微笑んだ。　神々しさすら感じさせる笑みだった。

そして次の瞬間、　少女の漆黒の目が、　レーラの漆黒の目を貫いた。

声が聞こえる…。

この声は彼女のものなのだろうか？

(……取り返しに来ました。　全てを。)

頭の中に直接響いている様だった。　とてつもなく頭が痛い……。
見えているのは、冷酷な目で自分を見ている先ほどの少女。

(……貴女の力は兄君よりもずっと弱い様ですね……。私との会話も長くは持たないでしょう。)

少女がレーラの腕をつかんだ。　そのとき激痛がはしった。

(……そろそろ限界のようですね……。兄君に伝えなさい。　真の王はこの私だと。　私は必ずそなた達を滅ぼしてみせる、と。)

そして、少女はもう1度微笑みを浮かべて、手を放した。

その瞬間、レーラの痛みが止まった。

息を切らしたレーラが顔をあげたとき、そこにはもう少女の姿はなかった。

捕まれた腕には痣が残り、頭の痛みの感覚も残っていると言っている。

レーラはそれが夢幻の様に感じられた。

第10話 アリアのドレス

『なんと言つか…。アリア…。まさかとは思うが、この俺にこんな服をはけと言うのか？』

『何を言いますか。エーデル公爵家次期当主たるシリウス様がその程度の服で何を怖じ気づいているのでしょうか。』

『お兄様、一応着てみてはいかがでしょうか？』

普段、シリウスは基本的に洋服に文句はつけない。メイド長のアリア、もしくはレーラに任せっきりである。幼き頃より、パーティー等に頻繁に出席させられていたシリウスにとって、服を着こなすことなど造作もないことなのだ。

たとえ、リボンやフリルがたっぷりついた、いかにも夢見がちな少女の理想の『王子様』な服装とて、着こなしてみせる自信がある。

そのシリウスだったが、この服装には流石に文句を着けた。

『…アリア、これはエーデル公爵家次期当主とか関係ないと思うが、というか、俺がこの服を着るのは人として間違っている気がするぞ。』

『しょうがないではありませんか。シリウス様は今でこそめったに舞踏会に出席することはありませんが…。以前は旦那様とご一緒によく出席しておられていました。それなりにお顔が知られておりますゆえ、いたしかたありません。』

『くっ……。』

言葉につまるシリウス。

『大丈夫ですわ。兄様なら、きっと美しく、可愛らしいと思います。』

『レーラ、俺に可愛らしいといってもそれは嬉しくないぞ。俺は男だっ！！』

そう、アリアがシリウスに用意した服は、薄い水色の生地、フリルとリボン、そしてブルーサファイアがたっぷりついた、豪華なドレスだったのである。

…いうまでもなく、女物である。

『…俺は絶対に着ないぞ。』

『ですがシリウス様、普通の格好をしていくと、相手に気づかれる恐れがあります。』

『そうです。兄様。今回の相手はあの「ノーフォーク伯爵」なのでしょう？』

そう。今回、シリウスは父、エーデル公爵ヴァインセントに頼まれ、ノーフォークという伯爵家が開く舞踏会に出席することとなったのだ。しかも、ただ出席することが目的ではない。

ノーフォーク伯爵の監視と諜報活動という目的があるのだ。

このノーフォーク家というのは、ドラゴンパレスに屋敷をもつ家である。

なぜ、監視しなければならないのかというと、女王陛下から父に命令がくだったからである。

命令は簡潔だった。

「ノーフォーク伯爵に反逆の疑いがある。それを調査するのです。」

このノーフォーク伯爵という人は大変用心深い人ということだった。たしか、自身が若い頃は、ノーフォーク家はシルバーパレスに屋敷があったそうだが、他家の策略により、現在は没落してしまい、ドラゴンパレスに屋敷を移さなければならなくなったそう。

そんな、不運なノーフォーク伯爵にかかった疑いだが、「さきの事件で莫大な被害をもたらした、反乱分子と繋がっている恐れがある。」とのことだった。

本当に面倒くさい。

しかし、シリウスもあの事件のことは自分にも関わりのあることだったので、自ら父に、「自分に諜報活動をさせてほしい」と頼み込んだのである。

自分たちを襲った連中の情報は皆無だったし、自分の中にある別人格のような力と衝動について、なにもわかることはなかった。正直な話、少しでも情報が欲しかったのである。

『…それでも女物はないだろう』

無駄な抵抗をするシリウス。

『シリウス様、お言葉ですが、黒目を持つ者は非常に稀です。見るものが見れば気づかれてしまう恐れがあります。』

そう。黒髪はともかく、黒目は世界でも稀な存在なのだ。昔は神の生まれ変わりといって、畏怖の対象にもなっていたらしい。

『そうですよ。兄様。それにこんなに素敵なドレスを着られるん

です。もう少し喜んでよろしいのでは？」

レーラが無邪気な笑顔でいう。

しかし、その言い分はシリウスが女なら通用するが、この場合だと、強烈な嫌味にしか聞こえない。

…もつともレーラは本心から言ったようだったが。

『嫌だ！　これは断固拒否するっ！』

このあと5時間にも及ぶアリアとの議論の末、シリウスはアリアにある条件をだした。

『俺にその格好をしろというならアレンにも舞踏会でドレスを着せることだ！あいつを説得出来たら俺も着てやるっ！説得できたらの話だがなっ！！』

……シリウスはこの時、アレンが了承するとは夢にも思っていないかったのである。

第11話 ノーフォーク邸

ここはドラゴンパレス、

「ノーフォーク邸」

この屋敷の中は様々な装飾品があり、見るものを楽しませる。

クリスタルパレスから取り寄せたと思われる、巨大なステンドグラスに描かれた女神は、陽光にあたり、光輝いており、非常に美しい。天井にある豪華なシャンデリアにも、ふんだんに、まるで水晶のように透き通ったガラスが使われている。

廊下にある絵には様々な色の宝石や魔法石が沢山埋め込まれている。

失礼な話だが、とても没落した貴族の家とは思えない。

花壇の花は雪に覆われており、楽しむことは出来ないが、それでも来客を十分に楽しませることが可能だろう。

その来客室に、3人の美女がいた。

2人は黒髪、黒目の髪の長い絶世の美女。姉妹のように良く似ている。もう1人は焦げ茶色の巻き毛のセミロングの少女。こちらも驚くほど美しかった。

（ね？ 兄様、アレン。気づかれなかったでしょう？）

（…嬉しくないな。俺はどこからどう見ても男だ！

……まあ、ここまできて気づかれても困るが。エーデルの次期当主がこんな趣味を持っていると誤解されたら困る……。）

（ははっ。大丈夫だよ、シリウス。正直な話、相当似合ってるよ？）

（黙れ。）

（ええ。兄様もアレンも良く似合っていますわ。）

本当に2人ともドレスが良く似合っていた。

シリウスは豪華な水色のドレス。ブルーサファイアがふんだんに使われたそのドレスは、涼しげな印象を与え、シリウスの漆黒の髪と目とのコントラストは非常に優雅なものだった。

アレンは薄い緑のドレス。

落ち着いた色だが、フリルが多く、アレンの巻き毛のこともあり、非常に可愛らしかった。

（良かったじゃないか、シリウス。レーラも誉めてくれたんだし。簡単にはバレないんじゃないか？）

（お前は何故そんなに楽観的になれるんだ。というか、そもそも、お前がアリアの頼みを断れば、俺がこんなことをするはめにはならなかったんだッ！）

——1週間ほど前

『アリアさん、俺に頼みごととは、どういったことでしょうか。』

『……そんなに緊張なさらなくても……。』

無理だ。アリアが来たということはシリウスがらみの話ということだ。

そして、シリウスがらみの話で良いことが起こったことなど、ほとんどない。

『それで、内容なのですが……。』

自分に「断る」という選択肢はないようだ。

『アレン殿にドレスを着てもらいたいのです。』

『………は？』

聞き間違いだろうか？

俺に何を着ると？

『シリウス様が今度の舞踏会に行くときに一緒に行ってもらいたいのです。』

『ちょっと待ってください。俺に何を着ると？』

『ドレスです。リボンとフリルがたっぷりの。』

聞き間違いではないらしい。

『ちょっと待ってください！！ 何故俺が女物の服を着なければならぬのですか！？』

舞踏会ということは、当然ダンスがあるはずだ。

ドレスを着た自分とシリウスが一緒に行くということは、ダンスも一緒に踊るということだろうか。

……気持ち悪い。

『俺は男ですよ？』

青白くなった顔でアレンがいう。

『…なにか勘違いなさっていませんか？ シリウス様にも女性の格好をしてもらいますよ？』

さらりと信じられないことをアリアは言った。

あの、無駄にプライドの高いシリウスが女装？

想像出来ない。おそらく、シリウスは何らかの理由でアリアに女装するよう頼まれたらしい。女装するのが嫌なシリウスは、アリアに提案したのだろう。「アレンが女装するといったら俺もしてやる。」とかいって。

読み間違えたな、シリウス。

普段、お前には痛い目にあわされている。少しは反省させてみようか。

『…アリアさん、その話、もう少し詳しく聞かせてくれませんか？』

いつの間にか、外は日が暮れていた。

『では、了承ということですね？』

『受けましょう。…しかし、本当にバレないんですよね？』

『大丈夫です。仮に気づかれても、エーデル公爵家の力で揉み消します。』

少し不安になった。

『…よろしく頼みます。』

『いちちらいぞ。』

こうして、アレンとアリアの交渉が終わった。

（何故お前は断らなかったんだ…。）

（いや、俺ってシリウスにはさんざん振り回されてる気がするからさ？）

にっこりと微笑むアレン。

（…つまり、俺への報復か…。）

がつくりと肩を落とすシリウス。

こうして、シリウス達の、ノーフォーク邸への潜入調査が始まった。

第12話 ノーフォーク邸 2

(………… ノーフォーク伯爵が来ましたよ。)

(………… やつとご登場か……)

(遅すぎるよ……)

ノーフォーク邸に着てかれこれ1時間が過ぎていた。自分とアレンは今はレーラの付き添いということだからよいのだが、レーラはエーデル公爵の名代ということである。身分が上であるレーラをこれほど待たせるとは、失礼きわまりない。

『お待たせしてしまい、大変失礼しました。始めまして、レーラ様。私は「ウィリアム・ノーフォーク」。以後、お見知りおきを。』

ウィリアム・ノーフォークという人は、初老の男だった。歳は40〜50位だろうか。金髪に碧眼で、落ち着いた雰囲気をはなっていた。

『いいえ、ノーフォーク様。 氣にしませんから。 始めまして。 「レーラ・エーデル」と申します。 こちらは親戚のカレン姉様、そして友人のアリスですわ。』

レーラがにつこりと笑い、シリウスとアレンを伯爵に紹介した。

『始めまして、伯爵様。 レーラの従姉のカレン・アリウムと申します。』

『ほう…。レーラ様とよくにいらつしゃる。初めてお目にかかりますが、失礼ですが、今日はどちらから?』

『アクアパレスから来ましたわ。レーラとは、遠縁の親戚で、母方の実家が同じ家なんですの。』

シリウスはカレンを見事に演じきった。

魅力的な笑顔を伯爵に振り撒いた。

『なるほど、アクアパレスから…。』

伯爵が納得したように頷いた。

この国の町は、交流が乏しい。5大都市は特にそれが厳しい。普通はよほど身分の高い者以外は自分の住む町の外へは自由に出られない。

『ええ。』

優雅に微笑むシリウス。

用心深い伯爵もまさかこの少女が男だとは思ってもよらないだろう。

『貴女のお名前も、お聞きしても良いでしょうか?』

伯爵が丁寧にアレンへ質問する。

『アリス・ウォルスキーと申します。カレンとは友人で、私もアクアパレスから来ましたわ。』

アレンもにこやかに微笑む。シリウスを困らせるために引き受けたが、ここで自分達の正体がバレるのは痛すぎる。

『そうでしたか。始めまして、アリス嬢。』

伯爵も笑顔を返した。

しかし、シリウスは一瞬だけ怪訝そうな顔をした伯爵の変化を見逃さなかった。エーデル公爵家が、アクアパレスの家（下位貴族）と親しくしているということが、怪しく思っているのだろう。

（一応、レーラの親戚だと言っし、無下に扱うことも出来ない——
—といった所か。これは後でフォローしておく必要があるな。）

『では、レーラ様もお二人も、宴を楽しんでってください。今日は夜も遅くなると思うので、是非とも我が屋敷に泊まってってください。部屋はメイドに用意させましょう。』

『いえ、そこまでしていただいては……。』

『かまいませんよ。うちの娘たちもお三方とお話出来ると喜びます。』

『光栄ですわ。 それでは…お言葉に甘えまして…。』

『ええ。 それでは、後ほど宴でお会いしましょう。』

『ええ。 では後ほど。』

それぞれが様々な思いを秘めた、ノーフォーク伯爵との最初の会談が終わった。

『ほら、伯爵も気づかなかったでしょう?』

この部屋は自分達にあてがわれた部屋だ。

豪華な装飾が施されたこの部屋には、シリウスの妨害の魔法がかけられており、外からの盗聴は不可能となっていた。

『男だとは気づかれはしなかったが、向こうは俺達のことを怪しんでいるようだったな。ここは1つ、あの伯爵に媚でも売っておくかな。』

『さすが、シリウスは余裕だね…。俺は気づかないかずっとハラハラしてたのに。』

『今さら、しかもお前がそれを言うのか。俺にこんな格好をさせたのはお前だ。お前は自分で女役を演じると決めたんだろ?』

若干、呆れたようにシリウスが言う。

『そうだけどさ…。多分、あの時の俺はどっか壊れてたんだ。いまあの時の自分に会えるなら、ぶん殴ってでも止めてると思うんだ。』

『……本当に今さらだな。』

『……うん。ゴメン、シリウス。』

『……いや、気にするな。俺もお前にストレスをかけすぎるのは駄目だと学習したしな。以後は気を付けよう。』

2人は虚ろな顔で慰めあう。

『お2人ともいつまでもそんなことを言っていないで、伯爵が私達のことを疑っているというなら、その疑いをとく、策を考えましょう。』

ばつさりと笑顔で切り捨てるレーラ。

『……わかった。』

2人とも、正論なので、言い返せなかった。

こうしてノーフォーク伯爵への対応を考える為の会議が始まった。

……若干シリウスとアレンが落ち込んでいるのはしょうがなかったが。

第13話 キーラとメアリ

『ようこそ、いらっしやいましたわ。 レーラ様。 それにカレン様、アリス様も。』

にこやかに迎えてくれたのはノーフォーク伯爵の娘、キーラとその妹、メアリだった。

『レーラ様はシルバーパレスから、カレン様とアリス様はアクアパレスからいらしたのでしょう？ 是非、お三方の町の様子を聞かせてほしいのです。』

キーラとメアリはキラキラした目をむけた。
他の町の様子など滅多に聞けるものではない。

『ええ、シルバーパレスはとても美しい町ですよ。朝日が登る時、町が白銀に輝き、何度みても飽きませんの。 それから神殿は…。』

レーラが町の説明を始める。

やはり、女の子同士、よく話が弾むようだった。

『カレン様、アリス様、アクアパレスはどうなんですか？』

レーラの説明が終わり、話が自分達に向いたようだ。

幸い、シリウスは一度だけアクアパレスに行ったことがある。

アレンも自分の付き添いということで一緒に行ったのだ。 説明す

るのは容易なことだった。

…もつとも、アクアパレス出身という設定はその経験があったために決めたのだが。

『はい。 アクアパレスは貿易が盛んで…。』

伯爵が敵と繋がっているという話が事実なら、この子達はそれを知っているのだろうか…。

そんなことを思いながら、シリウスは説明を始めた。

登場人物紹介 2? (前書き)

一応、ノーフォーク家の3人の紹介です？

見なくても支障はないかと思えますので、興味のないかたは飛ばしても大丈夫です？

登場人物紹介 2？

ウィリアム・ノーフォーク

Level 2

歳 ？？

家柄 ノーフォーク伯爵家

女王陛下への反逆の疑いがかかっているノーフォーク家当主。幼少の頃はシルバーパレスに住んでいたが、家が没落してしまい、ドラゴンパレスに移り住んだ。大変用心深い性格らしい。

キラ・ノーフォーク

Level 3

歳 13

家柄 ノーフォーク伯爵家

居住地 ドラゴンパレス

ノーフォーク伯爵家の長女。父と同じ金髪に碧眼の容姿をもつ。しっかり者。

メアリ・ノーフォーク

Level 3

歳 9

家柄 ノーフォーク伯爵家

キラの妹。金髪だが、父や姉とは違い、銀色の瞳を持つ。人懐っこい性格。

第14話 町と階級

『シルバーパレスもアクアパレスもさぞかし美しい町なのでしょうね……。』

メアリがうつとりとした表情でいった。

『私とメアリはあまり町から出たことはありませんの。』

『そうのですか……。ドラゴンパレスも素晴らしいですが、他の町も美しいですよ。こんど、是非私の家にもいらしてくださいな。』

レーラがキーラとメアリを誘った。

すると、少し困ったように2人は顔を見合わせた。

『……ごめんなさい、レーラ様。私達姉妹はLevel3なのです。シルバーパレスへの渡航は認められておりませんの。』

『ッ！ ……申し訳ありません……。』
レーラが謝罪した。

この国で階級を聞くことは非常に失礼な行為だ。身分や階級に応じて、様々なことが縛られてしまうので、階級を隠したいと思う者は沢山いるからだ。勿論、気にしない者もいるだろうが、それは少数派にすぎない。

『お気になさらず。 ……そろそろ舞踏会の準備をしなければなり

ませんね。』

微妙な空気になってしまった空間で、 キーラが言った。

『そうですね。 では、話の続きは舞踏会の後でもしましょうか。今日は泊まらせていただくので。』

シリウスが明るく言った。

『はい、カレン様、アリス様、レーラ様、また後ほどお願いしますね。 宴の席でお会いしましょう。』

『…ごめんなさい、兄様。相手の階級をきくつもりはなかったのですが…。』

『わかってる、レーラ。 だが、もう少し注意した方が良いでしょう。俺達は遊びに来たわけではないんだから。』

『まあ、シリウス。 そんなにレーラを責めるなよ。』

アレンがレーラをかばった。

『これから注意していけば良いんだし。 それに俺も少し警戒が甘

かったから。』

笑いながらいう。

おそらく、自分とレーラの気持ちを軽くしたいのだろう。普段はおおざっぱな癖にこいつは妙なところで優しいというかお節介なのだ。

もっとも、そういうアレンだからこそ、シリウスが親友と認められるのだが。

『まあ、お前ももう少し上手くしゃべってくれたら俺も楽しかったがな。』

シリウスも笑いながら言った。

アレンは最初に自己紹介した後は殆どしゃべらず、相づちばかりうつっていたのだ。

『俺よりも、お前の方が演技は得意だろう?』

『いつかもいったが…面倒だからといって全部俺に押し付けるな…。』

『努力するよ。』

全く反省していない様子のアレン。

『兄様、私も今後は気を引き締めてまいります。』

『ああ。だがあまり無理はするなよ？ 多少のことなら俺が誤魔化せるから。』

シリウスがレーラの髪に指を差しこむ。レーラが嬉しそうに微笑む。

『アレンも少しはレーラを見習え。』

『レーラは真面目過ぎるよ。シリウスに任せれば大抵の事はなんとかなるよ？』

『それもそうですね……。』

『アレンッ！！レーラにそんな事を教えるなッ！』

『レーラも納得してくれたよ。』

『……レーラ、アレンの言うことをまともに受け取るんじゃないぞ？』

『嫌ですわ、兄様。冗談ですよ？』

『そうだよ、シリウス。いくら俺でも全部人任せにはしないよ。心外だな。』

アレンがにっこりと笑った。

『……冗談には聞こえなかったぞ？』

『冗談だよ、6割くらい。』

『つまり、残りの4割は俺任せというわけか…。』

疲れたようにシリウスが言う。

この屋敷での調査は思っていたよりずっと大変な事になりそうだ――
――とシリウスは人知れず思った。

第15話 舞踏会、開幕

舞踏会には沢山の人が集まった。

『うわー。あの人ってシルバーパレスの貴族だよね？』

『ああ…。ラッシュ子爵だ。伯爵は他の町の人間をかなり招待したようだな…。』

『というか、シリウス。レーラは踊りに行っちゃったけど良いの？』
諜報活動が目的なのにのんきにダンスをしていて良いのか——と
いうことだろう。

『伯爵に近づくのは俺達の役目だ。レーラは父の名代だからな。レーラ自身が動くのは得策じゃない。』

なるほど、と納得したようにアレンが頷いた。

エーデル公爵家がノーフォーク伯爵家の反逆の有無を調べようとしているなど、絶対に悟らせてはならない。

『ただ、伯爵は俺達…特に俺を疑っているようだからな。黒髪黒目はレーラと同じで、エーデル家の親戚——と、我ながらなかなか酷い設定にしたものだ。』

設定が雑過ぎる。まあ、1夜限りなので良いが、何日もかかるような仕事なら、絶対にボロがでる。

『じゃあ、伯爵に近づくのは俺ってこと？』

心底嫌そうにアレンが言う。

『馬鹿を言つな。お前1人で行かせるわけないだろう。俺も一緒にいく。』

『は？』

『俺を伯爵が疑うのは黒髪黒目のせいだろう？ だから、目の色を変えれば良い。』

『…シリウス、変化の魔法が使えたの？』

啞然としたようにアレンが言う。

人の身体を変化させる魔法はとても高度なのだ。

『全部は無理だが、瞳の色くらいならな。 というか、容姿を全て変えられるなら最初からやっている。』

そこで、シリウスが小さな声で呪文をとねえた。
すると漆黒の目が紫に変化した。

『さすがだな。 …でも、さっきは黒目で今は紫っておかしいぞ。そこはどうするんだよ？』

『そこで、記憶改変の魔法を使う。 重要な記憶なら変えるのは難しいが、瞳の色程度なら問題ない。』

『なるほど。 …あつ、伯爵が出てきたぞ。』

『ふん…。いくぞ、アレン。』

不敵な笑みを浮かべるシリウス。

『了解。』

珍しく真面目な声音でアレンがいった。

伯爵との2度目の対面が始まるうとしていた。

第16話 ダンスと策略

『伯爵様。』

シリウスが美しい笑顔を浮かべながら、ノーフォーク伯爵に声をかけた。

『おお、これはカレン嬢、それに、アリス嬢も。』

伯爵がシリウスを見た瞬間、シリウスは小声で呪文をとねえた。伯爵は1瞬だけ、驚きの表情になり、また元の笑顔に戻った。

シリウスの記憶改変の魔法が効いたのだろう。

『どうですか？ 宴は楽しんで頂けていますか？』

『ええ、お陰さまで。』

シリウスがにつこりと笑った。

『それは良かった。』

『伯爵様は踊らないのですか？』

『私は見るだけでいいですよ。』

『いけませんわ、伯爵様。せっかくのパーティーなのですから。さあ、まいりましょう！』

シリウスがやや強引に伯爵の手をとって踊りに行った。伯爵も苦笑しながらついていく。

『…あいつもよくやるよ…』

（俺は男と踊るなんてごめんだ…）『』

いいながら、内心でそんなことをアレンは思っていた。

何はともあれ、伯爵の警戒を少しは緩めることが出来たのではないだろうか。

『どうだった？ 伯爵と踊ってみての感想は。』

素晴らしい笑顔でアレンが聞いた。

『…お前、楽しんでいただろう。』

『うん、凄くね。まさか、シリウスが伯爵と踊るなんて思ってもいなかったよ。』

『……』

何もいわないシリウス。

これは思った以上にダメージが大きかったらしい。

『…まあ、これでいくらかは警戒を緩めてくれるだろう。』

そこで、シリウスが表情を一変させた。

『…アレンッ！…レーラは何処だ！？』

『えっ…。レーラなら踊ってるんじゃない。』

そこで、アレンも気づいた。

さっきまでダンスフロアで踊っていたレーラの姿が何処にもない。

シリウスとアレンが必死で会場内を探す。

そして…

レーラはいつのまにか、ダンスフロアに戻っていた。

『兄様、アレン。どうしたのですか？』

『レーラ、急にフロアからいなくなるな！…！』

『…えっ？』

不思議そうにレーラが聞き返した。

『どうしたの？レーラ。』

『あの…。アレン、兄様、私はフロアから出てはおりませんよ？』

『だが、さっきはたしかにフロアにいなかったが……やられたッ！』

急にシリウスが叫んだ。
怒りの表情を浮かべて。

『どうしたの？シリウス』

『あの…兄様？どうかなさったんですか？』

『アレン、レーラ。俺達は伯爵に出し抜かれた。』

『えっ？』

『伯爵を見失ったッ！！』

第17話 闇の契約

『…エーデルからの来客が来たぞ。』

無造作な声音で金髪、碧眼の初老の男がいう。

『へえ…。 エーデルからは誰が来たのかしら？』

その言葉に応えたのは赤く長い髪に緑の目をした女。 いや、こちらはまだ「少女」と呼んだ方が相応しいかもしれない。

『レーラ・エーデルだ。 それとその親戚1人とその友人1人だ。』

どうしても良さそうに男が答える。

『大事なお姫様を寄越したの！ あははっ！！』

少女が心底可笑しそうに笑った。

『何が可笑しいのかは知らんが…。 俺が渡す情報はここまでだ。あとは自分達で調べるんだな。 それと、お前達の主に契約を忘れるなと伝えておけ。』

顔をしかめて男——ウィリアム・ノーフォークがいった。

伯爵はその言葉を最後に闇に消えた。

後に残された少女はというとまだ笑っていた。
そして笑いやんだ後、ひっそりと呟いた。

『「彼」はこないだろうとは思ってたけど、まさかお姫様を寄越すとはね…。「彼」やエーデルがどう動くか見ものね…。』

少女は、無邪気な笑顔だったのが一変して、凄みのある微少を浮かべた。

『もうすぐ会えるわ、お姫様。貴女も「あの人」もシエラ様の敵は全てこの私が倒してみせましょう…。』

少女はもう一度静かに、そして悲しげに笑い、姿を消した。

第18話 嵐の前の静けさ

『何処にいるんだ…。』

自分とすることが迂闊だった。

自分がノーフォークに呪文をかけられる状況だったということは、相手だって自分に呪文をかけられるということだ。

おそらく、自分とアレンは錯乱させられ、軽いパニック状態になっていたのだろう。

『…シリウス。伯爵が戻ってきたよ…。』

アレンが小さな声で教えてくれた。

たしかに、伯爵が戻ってきている。何事もなかったかのようにしているが、たしかに伯爵は会場にいなかったのだ。自分だけではなく、レーラにも伯爵の位置を魔法で探知してもらったが、探すことは出来なかったのだから。

『…アレン、伯爵は会場を抜けて、何をしていたと思う？』

『…え？ シリウスは何をしていたかわかるの？』

『あくまでも推測だが…。わざわざ、会場を抜け出してまでの用事だからな。伯爵がああ敵の仲間だとしたら…。敵をこの会場に呼び寄せる密会でもしていた…。とか。』

『えっ！』

『…そんなに真に受けるな、アレン。あくまで推測なんだから。』

シリウスが軽く笑った。

『驚かせるな……。』

少し怒りながら、アレンが言う。

そこで、シリウスも真剣な表情になった。

『アレン、それでも警戒は必要だ。油断はするなよ。』

『シリウス、これからどうするんだ？』

『そうだな……。少し、積極的に探ってみるか……。お前は、他の客から役にたちそうな情報を探ってみてくれ。』

『了解。お前も無茶はするなよ。』

『ああ、お前もな。』

『レーラ。』

『兄様ッ！……伯爵が戻りましたが……。どうなさるのですか？』

レーラは声をひそめて言った。

『アレンには他の客から情報を集めるように頼んだ。レーラ、お前もアレンと一緒にいくんだ。伯爵が敵と繋がっているなら、お前を狙ってくる可能性が高い。』

『わかりました…。兄様はどうなさるのですか？』

『俺はもう一度伯爵をさぐってみよう。』

『…お気をつけてください。』

『ああ。』

向かいの方で笑顔で誰かと話している伯爵。

さっきまでは非常に紳士的で優しい印象だった。

しかし、同じように笑っているようなのに、シリウスにはそれがとてつもなく不気味に見えた。

第19話 伯爵の思い

『伯爵様。』

カレンという少女が微笑みながら近づいてくる。エーデルの娘によく似た娘。おそらく、この娘もエーデルからの客なのだろう。

青のドレスに艶やかな黒髪。真っ白でなめらかな肌。彫刻の様に、否、それ以上に整った顔立ち。

そして――

さっきまでは漆黒だった瞳が紫にかわっていた。

それに気づいた瞬間、急激な睡魔が襲った。

自分の記憶を書き換えようとしている――！

記憶改変の術はこの様な幼い少女が使えるような代物ではない。

おそらく、自分がこの少女を警戒していると気づいたのだろう。

しかし、自分もれっきとした魔法使いである。

必死で相手の呪文に対抗する。

相手は自分が呪文にかかったと思ったのだろう。
魔力を弱めた。

短い時間だったはずだが、この上なく長く感じられた。なんとか呪文は破ったが、もう一度かけられて抵抗する魔力と胆力はないだろう。

久しぶりに肝を冷やした。

そして、この少女には絶対に自分が呪文を破ったことを知られてはならない――。

『どうですか。宴は楽しんで頂けていますか？』

何事もなかったように答える。

この少女がエーデルに深い関係を持つ者だということはほぼ間違いないだろう。

『ええ、お陰さまで。』

魅力的な微笑を浮かべる少女。女神の様に見えるその笑顔の裏は何を考えているのだろうか。

『それは良かった。』

私と「あの者」との関係を調べに来たのだろうか。

『伯爵様は踊らないのですか？』

この程度で負ける私ではないと思いしつてもらおうか。

『私は見ているだけで良いですよ。』

少女よりもさらに深く、微笑んで見せる。

『いけませんわ、伯爵様。せつかくのパーティーですから。さあ、まいりましょう！』

私はもう負けるわけにはいかないから。

我が願いを叶えるために。

そのためならば…

このドラゴンパレスでさえ、滅ぼしてみせよう。

番外編 これからも

『アレン、「人間の使う魔法には10の属性が存在する。その属性を全て答えよ」。』

『えっと……光、闇……、炎……、水？』

『…光、闇、炎、水、樹、地、氷、雷、風、無だ。次は「各属性の高位精霊を一体ずつ答えよ」。』

『えーと……。光と闇はたしかフェニックス……。炎はサラマンダ……。？』

『なぜお前は疑問形で答えるんだ。それと、サラマンダは下位精霊だ。』

ため息をつくシリウス。

『いや、だって今日しか勉強してないし……。』

『だからなぜ今頃から勉強を始めるんだ。』

『えっと……。気が向いたから？』

はつきりと目をそらすアレン。

『アレン……。受験日まであと何日だか知ってるか？』

『…1週間くらい？』

おそろおそろいうアレン。

そこでシリウスの怒りが爆発した。

『そうだ！！1週間だッ！！基礎中の基礎の問題も答えられないなんて…ッ。お前は馬鹿か！？この3年間、何をしていたんだ！？』

名目、私立シュヴェルツェ初等学校最終学年に所属しているシリウスとアレン。

アビリティ国立第1学校の受験日はすでに1週間後に迫っていた。

『うつ…。』

『いいか？アレン、受験勉強とは長い時間をかけてやるものだ！たった1週間で大丈夫だとも思っていたのか！？ましてや、俺たちが受験するのは、仮にもこの国で最難関の学校だぞ！？』

『…返す言葉也没有せん…。』

膝をつき、がっくりとうなだれるアレン。

『……………アレン。』

しばらく無表情で黙っていたシリウスが唐突に言った。

『…なんでしょうが、シリウス様？』

『これから1時間でこの本を暗記しろ。』

そういつて、アレンの目の前に落とされたのは2冊の本。

…どちらもとても分厚く、軽く千ページ位はあるだろう。

『ちよつと待つて！？ これを1時間で？無理だよ。せめて1日でしょう！？1時間じゃ読み終わりもしない…。』

突然、シリウスが攻撃魔法を放った。

…アレンに向けて。

『ッー！ シールドッー！』

間一髪でシリウスの呪文を防ぐアレン。

『いきなり何をするんだよ！？』

につこり笑うシリウス。

…その目は少しも笑っていなかったが。

『何って…？俺が聞きたいね。お前はあと1週間しかないのにそんな贅沢をいうのか？俺の魔法の1つや2つくらい覚悟があつての言葉だよな？』

『………すいません。1時間で覚えます……。』

『わかれば良いんだ。』

『シリウス、さすがに眠いよ…。』

昼間、シリウスが来てからすでに14時間が経過していた。食事と風呂の時間以外はぶっ続けで勉強していたのである。

『…そうだな。そろそろ今日は終わるか…。体を崩しても困るし…。睡眠は7時間で良いか?』

シリウスは意外にもあっさり了承してくれた。それも7時間も睡眠時間をくれるというのである。

『えっ！ 本当に良いの?』

『ああ、俺もそろそろ眠かったしな。別室を借りるぞ、アレン。』

シリウスはさっさと部屋を出ていってしまった。

その姿に少々違和感を覚えたが、そんな不可解な気持ちはすぐに吹き飛んでしまった。

やっと寝られるのである。

シリウスに感謝するアレン。

どう考えても受験に落ちそうな自分を助けてくれているシリウス。
なんだかんだで良い奴だと思う。

… たまに死にそうな目にあわされるが、今日は忘れておこう。

7時間後、そんな気持ちがすっかりと失われてしまっているシリウス、
嬉しそうに眠りにつくアレンだった。

『シリウス！！どういうことだよ！？』

『どうかしたのか？アレン。』

涼しげな顔で言うシリウス。

何度こいつに騙されたことか……！

『なんで眠っているときに頭の中で声が聞こえるんだよ！？』

つまり、こいついうことである。

シリウスはアレンが眠って程なくして、アレンの部屋に戻ってきた。
…アレンに呪文をかけるために。
アレンの夢を変化させる魔法を。

本の情報を全て魔法でアレンの夢に叩き込んだ。
おかげでアレンは眠っている間中、本の内容を暗記させられていた
のである。

これでは起きている時と変わらない。

『お前が眠いと言ったから眠らせてやったんだ。それに、この魔法
は効率が良い。…魔力の消費と難しさを別にすればだが…』

わざとらしくため息をつくシリウス。

眠っている時間は7時間程度なのに、夢の中ではすでに3日が過ぎ
ていた。

…3日間寝ないで勉強していたわけである。

『…お前、俺を殺す気か？正直、もう疲れたぞ…』

『大丈夫だ。この魔法はあくまでも「夢」に干渉する魔力だから
な。身体の疲れはとれているはずだ。』

優しく微笑むシリウス。

今はその綺麗な笑顔が悪魔に見える。

『じゃあ、もう一度寝ろ、アレン。家から要点をまとめたノートを

持ってこさせた。』

シリウスの前の机にはノートが20冊位のノートが置かれていた。

『嫌だッ！！』

必死で拒絶するアレン。

これだけの量を勉強するのはどう考えても1週間以上かかるだろう。つまり、夢の中とはいえ、1週間も勉強し続けなければならないということだ。…夢の中なのだから、当然、食事や休憩の時間はないだろう。

『黙れ。』

シリウスが軽く手を振ると、途端に急激な睡魔が襲った。

アレンはたちまち、深い眠りに落ちた。

アレンが目を覚めたのは受験日の前日。

『アレン、「各属性の高位精霊を答えよ」』

『…光と闇はフェニックス、炎はファイアリィ、水はウォーティ、樹はウツディ、地はガイア、氷はグラキエス、雷はグローム、無はリアンなど。』

『よし、正解だ。次は…、「魔法の行使のための条件を説明せよ」。
』

『…まず第1に各属性に対する適正と、精霊を使役するための魔力をもち……。』

すらすらと、だが虚ろな目をして答えるアレン。

『——よし、これだけであればなんとか大丈夫だろう。』

『…本当か？』

『ああ、もう休んで良いぞ、アレン。』

『そうか…。なあ、シリウス。』

『なんだ。』

『…お前は酷すぎる。。。』

『普段から勉強しないお前が悪い。』

呆れたように笑うシリウス。

『そもそも、お前は…。』

言葉を続けようとした所で気づく。
アレンがすでに眠っていることに。

『さすがにこいつも疲れた——か。』

夢で限界まで時間を延ばしての勉強である。身体に疲労はないが、精神力はかなり疲れているはずである。

『まったく…。』

正直、こいつの計画性の無さには呆れ果てる。
だが…

『次はもう少し計画的にな…。』

こいつには決めた事を絶対にやり遂げるだけの精神力がある。
…だからこそこいつは俺の呪文に抵抗しなかったのだらう。

シリウスはアレンに呪文をかけるとき、魔力を極力抑えた。

やる気がないのなら、簡単に破ることができるように。『まったく、
明日は頑張れよ?』

シリウスは邪気のない笑みを浮かべる。

そして、ラインフォード邸を後にした。

『シリウスッ！レーラッ！』

アビリティ国立第1学校の受験者に合否の手紙が届いた日。

これ以上ないほどの笑顔を浮かべたアレンがエーデル邸を訪ねてきた。

『その様子だと受かったようだな？』

からかう様に言うシリウス。

『ああ！』

得意げに言うアレン。 受かったことが余程嬉しいのだろう。

『おめでとございます、アレン！！』

レーラが嬉しそうに微笑む。

『ありがとう、レーラ。そういうシリウスこそどうだったんだ？』

シリウスは不敵に笑って、銀色の何かを自分に投げた。

手にしたものをしてみると、学校の校章の入ったバッチであった。

『悪いが、俺が落ちるなんてあり得ないな。』

嘲るように言うシリウス。

『どうやら、俺が学年主席らしいな。』

紛れもない、本物のバッチであった。

『流石だな……。』

第1校の受験者は毎年一万人を越える。その中でシリウスは上位500人にはいり、その頂点に立って見せたのである。

『兄様ですもの。』

レーラが得意げに言う。

『ははっ！そうだったな！ まあ、来年もよろしくな！』

アレンは大きな声で心底愉快そうに笑った。

『ああッ！！』

シリウスと腕をぶつけ合う。

出会った当初は男爵家の長男に過ぎない自分が公爵家の時期当主と長い付き合いになるなんて思ってもいなかったが。

この友人とはどうやら長い付き合いになるようだ——とアレンは思った。

第20話　美しい音色

シリウスは伯爵を監視していた。

気づかれないように気配を殺して。

今の所、伯爵は特に怪しい動きはない。

ダンスフロアからは少し離れた場所で伯爵は知らないご婦人と話し込んでいた。

話の内容は気になるが、近づき過ぎると気づかれるおそれがあり、かといって、魔法で盗聴でもしたら、気づかれたときの言い訳すらできない。

（兄様…。聞こえますか？）

（シリウス？）

レーラとアレンがテレパシーの魔法で話しかけてきた。

（ああ。だが、今の所、特に何もないな。）

（そうですか…。）

（シリウス、それよりもうすぐ宴が終わってしまふ。邸の中を調査するのは今が絶好の好機じゃないか？）

（駄目だ。今、会場を抜け出してみろ。絶対に怪しまれる。邸を調べるのは今夜だ。）

レーラとアレンにそう伝えた所で、伯爵に動きがあった。

ご婦人との会話が終わったらしい。

笑顔で手を振りながらご婦人を見送る伯爵。

そして、伯爵は自分の方に近づいてきた。

（…ッ！　伯爵がこっちに来た。後でまた連絡する！）

シリウスはそういつてテレパシーを断ち切った。

（兄様ッ！）

レーラはシリウスに語りかけたが、テレパシーが切られたのを感じて諦める。

『アレン…。　兄様は大丈夫でしょうか…。？』

心配そうに言うレーラ。

『大丈夫だよ。シリウスがこういうことでヘマをするわけないし。』

樂觀的な口調で無責任にアレンが言う。しかし、そこでアレンも少しだけ真面目な表情で諭すように言う。

『それに、心配するより、俺達は少しでも多くの情報を集めた方がシリウスも喜ぶと思うよ?』

正論なのでレーラも言い返せない。

伯爵について、自分達はあまり多くのことを知らない。書類上のことなら、この邸に来る前に調べたが、書類ではわからないこともとても多いのだから。

『…わかりました。』

不承不承といった風にレーラが頷いた。

『まずは、伯爵の娘のキーラ嬢とメアリ嬢に話を聞いてみよう。』

アレンが苦笑しながら言った。

『カレン嬢！ またお会いしましたな！』

シリウスに気づいた伯爵が笑みを浮かべながら近づいてきた。

『ええ、伯爵様。』

『それより、踊られないのですかな？』

伯爵がいたずらっぽく言う。さつき少々強引に誘ったことを揶揄しているのだろう。

『ええ…。少々気分が悪くて…。人酔いしてしまったみたいですわ…。』

綺麗な顔に少々疲れた様な表情を浮かべるシリウス。

『それはいけない…。では、もう部屋に案内させましょうか？ 宴もそろそろ終盤ですし…。』

心配そうな声音でいう伯爵。

しかし、その目は人を気遣う者の目をしていない。
何か他のことを考えている目だ。

たいしたものだ——とシリウスは思う。
おそらく、自分でなければ、伯爵のこの演技にすっかり騙されていたのだろう。

しかし、自分は違う。

幼き頃からエーデルの時期当主として育ったシリウスである。人の演技など見慣れている。それがどんなに巧い仮面でも、それを見破れるだけの力がある。

『…大丈夫ですわ。もう少しですし、レーラやアリスに迷惑をかける訳にはいきません。』

弱々しく微笑んでみせるシリウス。

その微笑みはまるで聖女の様に透き通った綺麗な笑みだった。

（伯爵、流石の貴方にもこんな真似は出来ないでしょう？）

本心を隠した会話とはなんと愉快なことか。

『そうですか…。——ああ、最後の曲が始まったようです。』

美しい音色が響き渡る。

『美しい音色ですね…。聞いたことのない曲ですが……。』

首を傾げるシリウス。

『聞いたことがないのは当然でしょうね…。これは私の作った曲ですから。』

伯爵が苦笑とともに言う。

『まあ！伯爵は楽譜をかくことができるのですか？』

貴族のたしなみとして、歌を歌うことのできる者は数多く存在するが、楽譜をかくことのできる者はごく僅かしかない。

『ええ。まあ。』

『何と言う曲なのですか？』

キラキラした目で無邪気にきくシリウス。

『曲名は——。』

『旦那様ッ！！』

伯爵が答えようとしたその時、伯爵家の執事のような人が慌てて駆け込んできた。

第21話 破壊

『旦那様ッ!!』

『…どうした。そんなにあわてて。』

伯爵が少し不機嫌そうに答える。

無理もない。例え何か問題が起こったとしても、会場にいる客には悟らせてはならないのだから。

『ッ失礼しました! ……………。』

『…………。』

執事の話の聞いている内に、伯爵の表情がどんどん険しくなっていく。

『どうかされましたか?』

シリウスは控えめにたずねた。

『……。失礼、カレン嬢。——。』

伯爵は答えず、一瞬何かを呟いた。

そして次の瞬間会場いっばいに伯爵の声が響いた。

『皆様、先ほど、このドラゴンパレスにテロリスト達が侵入した模様です。テロリスト達は赤い生地に黒い鳥が描かれたマントを着ているとのこと。現在、テロリスト達は町の中心部に位置する神殿を襲撃している模様で――』。』

（レーラッ！アレンッ！）

伯爵の言葉を聞いた瞬間、シリウスはレーラとアレンにテレパシーを送った。

（兄様、聞こえていますッ！）

（俺も大丈夫だ。それより、これからどうするんだ？神殿に行くのか？）

（いや、神殿にはいかない。）

（どうしてですか？）

レーラが意外そうに聞き返した。

（神殿が襲われたという情報を伯爵が俺達に隠さなかったということとは、事態がそれだけ深刻だということだ。そして、ノーフォーク伯爵家はこの町では有力貴族だろう。）

（つまり…。）

（ああ、神殿が伯爵に応援を頼むことは十分に考えられる。それに、

伯爵はどちらにせよ、神殿にいかねばならないだろう？)

(そうか!! 神殿からの応援がなくても、伯爵と敵が繋がっているのなら...))

(敵方の応援に行かなければならない——ということですね。)

(ああ。それに伯爵が神殿に行かなくても、この状況は俺達にとってもチャンスだ。このパニックで、邸の警備は薄くなるだろう。)

(では.....。)

(レーラ、アレン。合流しだい、ノーフォーク家内を調査する。)

ドラゴンパレスの神殿は普段なら、美しく輝いている。宝石や魔法石が煌めき、そして神殿の中には巨大な女神像がある。その女神像は周辺の宝石の光を反射し、 幻想的な青に輝く。

しかし、今日は違った。いつもは青く輝いているはずの女神像は、真っ赤に輝いていた。

神殿の外では白いローブの者達と深紅のマントの者達が激しい呪文の応酬をしていた。

いや、呪文だけではなく、魔獣や精霊を召喚している者達もいた。

真っ白なローブの者達はこの神殿の神官達だろう。

5大都市の神殿で働く神官達は全員が優秀な魔法使いだ。

シルバーパレスとドラゴンパレス以外の町では神殿以外で魔法使いがいないため、とても貴重な存在でもある。

そして、彼らは町を守る最も強固な盾でもあった。

彼らが一斉に呪文を唱える。

『ライトニングッ!!』

青白い電撃が一斉に赤いマントの集団に襲いかかる。

しかし、その攻撃は容易く打ち消された。

1人の少年の手によって。

赤いマントを羽織ったその少年は銀の髪に漆黒の目をしていた。

少年が軽く手をふると、電撃が打ち消されてしまった。

神殿の魔法使い達は一気に真っ青になる。

彼らは魔法使いの中でもエリートである。

そんな精鋭である彼らの魔法が少年にはまったく通用しなかった。

いつしか攻撃がやんでいた。

いくら攻撃してもこの少年に阻まれてしまうのだ。

呆然と立ち尽くす神官達に突然、少年が呟く様に語りかけた。

「……僕は人殺しが好きな訳じゃありません……。僕達はこの神殿の女神像さえ破壊できれば良いんです……。ですから……引いてもらえませんか……？」

少年のその言葉を聞き、神官達は怒りに燃えた。

自分達は選ばれた魔法使いであるという優越感ゆえか。年端もいかないこの少年が自分達に向かって傲慢ともいえる発言をしたのが許せなかった。

「……逆賊の分際で……！！我らを甘く見ないでもらおうかッ！　ライトニング・インベルツ！」

天空から雷撃が降り注ぐ。雷属性の上级呪文。使える人間はごく僅かしか存在しないだろう。

呪文を放った神官が哄笑する。

敵方を見れば、煙に包まれており、その周辺の大地は痛々しく抉れていた。

それを見て、他の神官達にも徐々に笑顔を取り戻し初めた。

『ふん…。女王陛下に反逆する愚か者どもが…。』

嘲るように笑う神官達。

しかし、突然その笑顔が凍りついた。

少年を初めとする、赤いマントの者達は、全員、無傷で立っていたからだ。

『…引く気はないということですね…。仕方ありません。』

少年が手を神官達の方へ向けた。

『ごめんなさい…。我が敵を貫け…ファイアー・ランスッ!』

巨大な灼熱の炎の槍が神官達を一斉に貫いた。

『あつた…。』

呟いたのは赤いマントを羽織った赤い髪に緑の瞳をした少女。

『…ちよつと待ってください…。』

後ろから走ってきたのは先ほど神官達を殺した少年。

『あら、来たの。ラスト。』

『…ミラさんに任せたら危なっかしいじゃないですか…。』

ラストと呼ばれた少年は苦笑しながら答えた。

『心外ね！ …まあ、貴方が来てくれて助かったのは事実だけど。』

不承不承といった風にミラはいった。

『…それよりミラさん。これがそうですか？』

ラストが見上げたのは巨大な女神像。

『…ええ。これには私たちが封印するのを阻む魔法石が埋め込まれているわ。』

『…これがあと4つもあるんですか…。』

疲れたように呟くラスト。

『ふふつ。大丈夫よ。私達なら。』

ミラは軽く笑った。

『さあ、まずは1つ目——ね。』

『はあ…。それでは、破壊しますね…。ファイア・ランス!』

炎の槍は赤く輝く女神像を貫き、粉々にしてしまった。

そして、その中心に埋め込まれていた青く輝く魔法石が姿をあらわす。

『貴方の魔法でも壊れないなんて…。』

ミラが驚いたように言った。

『…壊れなくても、この場所から持ち出せれば大丈夫です。それに、そろそろ警備隊とかがたくさんくるころだと思います…。はやく町から出ましょう…。』

『貴方がいるなら、警備隊位簡単に倒せるんじゃない?』

『……僕は人殺しは嫌いです…。』

ラストが不機嫌そうにいった。

『ああ、そうだったわね。』

『…無駄な戦いはシエラさんだって望まないと思いますよ…。』

ラストは呆れた様にミラを見た。

『シエラ「様」よ!「さん」なんて呼んだらダメよ!ラスト!』

『…どうでも良いでしょう…。………転移させますね——。』

ラストが手をふると、ミラを初めとする赤いマントの集団が一気に消失した。

破壊された神殿に残ったのはラスト1人。

『…シエラ「様」か…。』

嘲るように呟く。

自らが殺した神官達に向かって話しかける。

『…君たちには悪いことをしましたね…。個人的にはあの人が悪いとは思うんですが…。僕はあの人に逆らえせんし…。』

美しい顔を悲しげに歪ませる。

白銀に輝く髪と漆黒の目が月明かりに照らされ、輝く。

『…ごめんなさい。』

その言葉を最後に、ラストは転移した。

神殿からは生きている者がいなくなった。

第22話 アレンの感覚

『生き残りはいないのか…？』

『はい…。旦那様…。神官達は貴族達に応援を求めにいられた者達以外、全滅だそうです…。』

ここは、襲撃にあつた神殿。

神殿を豪奢に飾っていたたくさんの装飾品は瓦礫に埋もれ、美しい顔に慈悲深い笑みを浮かべていた女神像は無残にも砕け、見る影もない。

『…神官達の死体はどうした？』

ノーフォーク伯爵が問う。

『はい。現在、シルバーパレスより上級魔法使い達が応援に来ており、傷痕を調べているとのことですよ…。』

魔法使いの死体を調べることはよくあることだ。

戦争などで、敵の魔法使いの力量や、使う属性など、有益となる情報を多く含んでいるからだ。

『そうか…。』

それきり、伯爵は押し黙ってしまった。

『旦那様…？』

『…………… 神官達のことはシルバーパレスの者達が面倒を見るのだから？ ならば我らは必要無さそうだな。… 帰るぞ。』

伯爵は不機嫌そうにそう言うと、さっさと馬車の方へ歩いていってしまった。

従者があわてて後を追う。

『…………… そうですね、昨夜はちゃんとお客様をおもてなしたのだからうな。』

伯爵が不意に質問した。

『あつ…。はい、勿論です。』

『そうか…。喜んで貰えると嬉しいが…。』

伯爵はうつすらと微笑みながら呟く。

しかし、その目はまったく笑っていない。

見る者を怯えさせる、冷酷な光が宿っていた。

『シリウス兄様…。伯爵はやはり神殿に赴くようです。』

『そうか…。』

紅茶を飲みながらチェス盤を見つめているシリウス。

今は落ち着いたクリーム色の、しかしレースやリボンのたつぷりと付いた可愛いワンピースを着ている。端から見ると、美しい2人少女が優雅に紅茶を飲みながら、友人とチェスを楽しんでいるようにしか見えない。

いや、友人とチェスを楽しんでいるというのは本当だが。

『……チェックメイトだな。アレン。』

シリウスが軽く笑いながら言う。

『ははっ。お前は本当にこういうのが強いよな。』

アレンも笑いながら言った。こちらも薄い青色だが、デザイン的にはシリウスの物と同様、レースやリボンがたつぷりのワンピースを着ていた。

『兄様はチェスやカードゲームみたいな、頭脳戦が昔からお得意でしたからね…。兄様、今夜はどうなさるのですか？』

レーラが聞いてきたのは、どうやって伯爵家を調査するのかということだろう。ノーフォーク家はドラゴンパレスの家柄とはいえ、れっきとした伯爵家。それなりの使用人や私兵はいるだろう。

『そうだな…。』

シリウスはトランプをレーラとアレンに配りながら呟く。

『……レーラ、今夜、キーラとメアリのどちらかに呪文をかけることは可能か？』

『呪文ですか…？可能だと思いますが…。どのような？』

レーラがカードを受けとりながら聞き返した。

呪文を人にかけると聞いても、その目に驚きや躊躇いの光はない。

『3だ……。今晚、少しだけ体調を崩してもらう。』

『…それはちよつと可哀想じゃないか？……4。』

アレンが少し顔をしかめる。

『今夜だけだ。なにも本当に病気にするわけじゃない。』

伯爵が出かけていて警備が薄くなっているとはいえ、油断は出来ない。

邸の使用人達の注意をそらさなければならぬ。

『今日、色々と邸を見て回ったからな…。あの2人の部屋の位置は覚えた。』

『5…。あの、兄様…。』

「ん？　なんだ、レーラ。…6。」

シリウスがレーラに向き直る。

「呪文をかけることなら、兄様の方が確実ではありませんか？　なぜ私に？」

「あつ、それは俺も思った。…7。」

その疑問は的をえていた。攻撃呪文や防御呪文のように、基礎呪文ならばレーラもアレンもシリウスに退けをとらない。しかし、気づかれないように相手の体調を操るといふ魔法は比較的難しい。

自分ではない「何か」を操る魔法は大体、中級呪文に属している。それならば、魔法の得意なシリウスの方が確実なのではないかと考えた2人の意見は正しい。

「ああ、その理由か…。」

「はい。どのような理由なのでしょう？　…8です。」

「9だ。それは、俺は神殿の様子を監視しなければならぬからな。こういった魔法は俺しか使えないからな…。」

たしかに、神殿に行く伯爵の監視は必要だ。しかし、ノーフォーク家の客人である自分達は今、この邸から出ることは出来ない。邸を調べる為という理由もあるが、伯爵が客人の安全の為に邸を出ないように頼んできたからだ。へたにこれを破って警戒されたらかなわない。

そういうことで、シリウスは部屋から魔法で伯爵を監視しなければならぬ為、レーラに頼んだという訳だ。

『なるほどね…。10…。じゃあ、俺はここでシリウスと待機?』

追跡や透視の呪文は意識を魔法にあずけるため、傍に誰かがいないと、邸の人間が訪ねてきた時に反応出来ない。

『ああ、そうだ。だからレーラにお願いしたいんだ。頼めるか?』

『はい、勿論です。兄様。11ですわ…。』

『ありがとう。それと…ダウトだ、レーラ。』

シリウスがにつこりと笑いながら言う。

『あつ…。残念です…。』

レーラが苦笑しながらカードをめくる。

カードは13。

テーブルのカードを手元に引き寄せる。

どれくらいの時間がたっただろうか。

シリウスの手札はあと一枚。

続いて少ないのがレーラで最後にアレンと言う状況になっていた。

『じゃあ、そろそろ、伯爵も神殿に着いた頃だろうし…。レーラにも行って貰おうか。13だ。』

シリウスが最後のカードを置いた。

『…ダウトだ。シリウス…。』

最後の1枚なので、アレンが仕方なく言う。

しかし、シリウスのめくったカードは紛れもないダイヤの13だった。

『残念だったな、アレン、レーラ。』

シリウスが不敵に笑う。

『相変わらずお強いですね…。』

『ああ、また最下位だ…。』

レーラとアレンが悔しそうにいった。

『2人共、次までには腕を上げておくんだな。まあ、俺は負けないが。王が弱いと下もついてこないしな。』

シリウスは傲慢ともいえる台詞を言う。

『兄様らしい言葉ですね…。』

レーラとアレンは苦笑するしかない。

『……レーラ。伯爵が神殿に着いたようだ。キーラ、もしくはメアリに呪文をかけてきてくれ。ただし、無茶はするなよ?』

『了解です、兄様。』

にっこり微笑んでレーラが答える。
そして、レーラは部屋を出ていった。

『アレン、誰かが来たら頼むぞ。』

シリウスはそう言っただけで目をつぶった。
意識を魔法に委ねたのだらう。この魔法は集中しないと相手に気づかれるおそれがある。

『…しくじるなよ、シリウス。』

アレンが少し疲れたように言った。

アレンは窓から外の様子を確かめる。
神殿の方から大量の煙が上がっているのが見える。それを見てアレンに一瞬、悪寒が走った。大切な物が壊されるような、そんな感覚が。

『どうなってるんだろうな…。』

ひっそりと呟く。自分のこの類いの感覚だけは外れたことが1度もない。

『…早くシルバーパレスに戻れるように願っておくか…。』

何故だかわからないが…。アレンはこの事件を一刻も早く終わら

せなければならぬ。そう思った。

第23話 覚悟

己の意識を魔法にゆだねる。いつも思うのだが、この感覚はどこか懐かしい感じがする。

膨大な魔力に包まれるこの感覚。

（…神殿か……。）

シリウスが「視て」いるのは襲撃にあったこの町の中心である神殿。

中にはまだ敵が潜伏しているらしく、神官達や貴族達の私兵達がぞくぞくと内部に突入していく。

もともと、敵とは圧倒的な実力差があるようで、こちらの被害は拡大する一方であるようだが。

伯爵は今、貴族達や神官達が反逆者鎮圧の拠点としている神殿前広場にいる。広場の周りにはさまざまな店がたくさんある。当然、魔法具や科学技術による武器を売っている店や魔法薬などの医療品を取り扱う店もあるわけで、貴族・神官側は武器や医療品には困らない。

（…なるほどな……。

どうやら、ドラゴンパレスの貴族達もそこまで無能というわけでもないようだな…。）

シリウスは嘲るように呟いた。

貴族達が無駄な私兵を送り込む理由がわかったからだ。

彼らは功績が欲しいのだ。ここで敵を捕らえることが叶えば、シルバーパレスに移住することすら夢ではなくなる——などとも思っているのだろう。

そして、自ら神殿に行かない理由は無意識の内に怯えているからだ。最初に突入した神官や貴族軍はほぼ全滅したようだ。この広場に戻ることができれば助けることが出来ただろうが、敵はそうとうな術師らしく、炎属性の上級呪文を次々と使い、自分達をいとも容易く殺していく。

死んでしまつてはどんなに強力な魔法薬も呪文も役には立たない。無惨に焼けただれた死体を見れば、嫌でも恐怖がわいてくる。自分はあるふうの死にたくない。ならば私兵を使えば良い。それなら私に危険は無いし功績もたてられる。

そんなことを思っているのだろう、多分。

しかし、シリウスは戦術自体を批判している訳ではない。指揮官となつている各貴族達が今死んでも困るし、それに微々たる力だとしても敵に兵を送るのは悪いことだとは思わない。

こちらは長期戦に有利なのだ。敵方の体力と魔力が尽きるまで戦わさせる。敵が飛行や転移の呪文を使う暇を与えない程度の戦力を送り続ければ、こちらの勝利は余程のことがないかぎり揺るがない。

シリウスはそう思う。

貴族軍や神官達の被害が拡大することになるとは思うが、これは必要な犠牲だと思っている。

この敵を侮るわけにはいかない。以前、シルバーパレスの優秀な者

達を虐殺した者達なのだ。

今逃がせば後々に厄介な火種を残すことになるだろう。それは国にとって大きな損失になる。内部からの反逆者の存在は隣国の兵を呼び寄せるのだから。しかし、敵を捕まえれば有力な情報を吐かせることが出来るかも知れない。

だが――

この貴族達はそんなことを考えて動いているのではない。国のことなど考えてはいないだろう。

自らの地位と名誉。

それだけしか考えてはいない。

自分達は自分の言葉で他者の運命を操ることの出来る地位にいるのだ。

贅沢な暮らしや綺麗な服に様々な特権を持つ貴族。

だからこそ自分達は一般人とは負った責任が違つとシリウスは考える。

人の上に立つ強者は国を守り、自らの命をかける覚悟を持つべきだと。

この貴族達にはその覚悟があるのだろうか。

(…まあ、考えてもしょうがないか。)

シリウスは軽く笑って視線を神殿になおした。

すると、空から雷撃が次々と落ちていくところだった。

あれを使つた術師もかなりの技量だろう。

普通の者ならおそらく即死である。

神殿から笑い声が響いてきた。戦闘が終わったらしい。

（今回はなんとか勝ったようだな…。）

シリウスがそう思ったとき、神殿から大きな爆発音が轟いた。
巨大な炎の槍。

それが神殿を破壊していた。
深紅に染まった神殿。

貴族達の慌てる声がする。

しかし、伯爵は落ち着いたままだった。

静かに神殿を見つめるその目に動揺の色はない。

（……。ここをこれ以上「視て」も無意味だな…。）

シリウスはそう結論付けた。おそらく、これから暫くは何も動きはないだろう。

あの炎の槍を受けて生き残った者など皆無だろうし、たいして情報も得られそうにない。

（伯爵も今は動きはないようだしな…。）

そうして、シリウスは「目」をあけた。

『レーラ様！ 来てくださったのですか？』

無邪気な微笑みをむけるメアリ。そしてキーラ。

『ええ。ご迷惑ではなかったでしょうか？』

レーラは美しい笑みを2人に振りまいた。

レーラは部屋に入った瞬間から魔力を少しずつキーラに集中させている。キーラとメアリに気づかれないう程度のごく少量の魔法。

『そんなことはありませんわ！ さあ、そちらに座ってくださいな。お茶の準備をさせましょう。』

そう言つてキーラはメイドを呼ぶ。

レーラは言われた通り、椅子に座らせてもらった。

メイドは部屋に入ると、早速お茶の準備を始めた。
部屋の中に紅茶の良い香りが広がる。

『良い香りでしょう？ このドラゴンパレスで栽培された薔薇の花の紅茶ですの。』

キーラがにっこりと微笑む。

『気に入っていただけましたか?』

メアリが少し心配そうな顔でレーラを見る。

『ええ、とつても。』

レーラが微笑む。

しばらくすると紅茶と様々な種類のお菓子が用意された。

カスタードクリームがたっぷりと使われたシュークリーム、林檎と桃のコンポート、バイクドチーズケーキ、フォンダンショコラ、苺のミルフィーユにショートケーキ。さらには薔薇の花の形をした飴細工がそれらをきらびやかに飾っていた。

『普段はこんな時間に食べるような物ではないのですけど…。』

苦笑いしながらキーラが言った。

神殿の件が気になって眠るような気分ではないということだろう。

『お姉さま、レーラ様、お話は食べながらにいたしませんか?』

メアリが待ちきれないようにいった。

『それもそうね…。』

メイドが3人のカップに紅茶を注いだ。

『レーラ様、カレン様とアリス様はいらっしゃらないのですか？』

レーラは一瞬、カレンとアリスとは誰だろうかと考えてしまったが、すぐにそれがシリウスとアレンの偽名だと思い出す。

『ええ、2人とも、少々疲れてしまったようで…。』

レーラは申し訳なさそうに言った。

本当は部屋で貴女方の父君を監視しているんです——なんてとてもじゃないがいえない。

『そうですか…。それは残念ですわ。』

『レーラ様は他の町にお出掛けになったことはありますか？』

メアリが無邪気に聞く。

『私もあまり自分達の町の外には出られませんの。このドラゴンとアクアパレスしかありませんわ。お2人はあるのですか？』

『私達もあまりないんですが…。この間クリスタルパレスに行ってきたんです。』

キーラとメアリが嬉しそうにいった。

『まあ、羨ましいですわ。クリスタルパレスは神殿が大層美しいとお聞きしていますが…。』

『ええ！それはもう、噂に違わぬ美しさで――！。』

キーラとメアリは町の説明に夢中になった。

レーラはその隙に集中していた呪文をキーラにかけた。無言呪文は難しいが、この程度の簡単な呪文ならレーラにも問題なく扱えた。

レーラは密やかに微笑んだ。

シリウスは「目」をあけた。

先ほどまで「視て」いた神殿ではなく、ノーフォーク邸の部屋が見えたことにより、シリウスは魔法が成功したとわかった。

この魔法は気づかれると追跡されて攻撃を受ける可能性が高い。自分が無傷だということは、追跡の魔法は無事に気づかれなかったということだろう。

『お疲れ、シリウス。』

アレンが笑いながらいった。

『ああ。流石にこれは疲れるな……。俺が「視て」いる間、誰も来なかったか？』

『ああ。皆事件のことで忙しいみたいだからね。それにしても、さつき神殿から凄い音がしたけど、あれは何だったんだ？』

『……敵の攻撃だな。炎属性の上級、もしくは特級呪文かもしれない。おそらく、あの攻撃のお陰で神官達の多くがやられたな。』

シリウスが無造作に答える。

『特級呪文って……。』

アレンが驚いたように呟いた。

上級呪文ですら、使えるようになるのはごく一部の人間だけだ。

これは、努力だけの問題ではなく、単純に才能の問題がある。

魔法の行使には、自身の魔法力と、属性への適性。この2つが必要となる。特に前者は才能がものをいう。属性への適性はなくても無属性の呪文はつかえるのでカバーができる。しかし、魔法力の量だけは、訓練で上がる量などたかが知れている。

『ああ。これからはさらに気をつける必要があるな……。』

シリウスは深いため息をついた。

『それはそうと、アレン。レーラはまだか？』

シリウスは不思議そうに聞いた。実際、シリウスは長い時間伯爵を監視していた。レーラの方が先に終わるだろうと思っていたのだが。

『そういえば少し遅いな…』

アレンが心配そうな表情になった。当然であるが、今はもう真夜中である。午前2時を過ぎたところだろうか。

『…噂をすれば——だな。』

シリウスが笑った。

すると暫くして、ノックの音がして、レーラが帰ってきた。

『ごめんなさい、遅くなってしまって…』

申し訳なさそうにレーラが謝る。

『いや、俺も今終わった所だから。』

シリウスは優しく微笑み、レーラの頭を撫でた。
レーラは嬉しそうに微笑んだ。

『はあ…。この兄妹は…』

（いつもながら仲のよろしいことで…）

アレンは胸の中で、ひっそりと呆れたように呟いた。

第24話 鍵の写真

別世界のように整えられた美しい庭園。その庭園のなかに2人の男女がいる。

美しい声。透き通るような高いソプラノ。

そしてそれにあわせるように穏やかなバイオリンの音色。

歌っているのは黄金に輝く艶やかな髪に銀色の瞳の年若い美女。

そしてバイオリンを奏でるのは金髪に碧眼の整った顔立ちの若い男だった。

完璧な調和。

2人の造り出す1つの「歌」は、どこまでも透き通っていて、美しかった。

ノーフォーク邸は、軽いパニック状態に陥っていた。
屋敷の主と専属の主治医が神殿に赴いているときに、急にキーラが倒れたのだ。

『…キーラ様は大丈夫かしら?』

『さつきまであんなにお元気そうだったのに…』

『やはりお疲れになっていたのではなくて?』

『そうかもしれないわね…。舞踏会の夜ということもあるでしょうし…』

メイド達が盛んに話し合っていた。

使用人達も手の空いている医者を探すべく、走り回っていたが、皆、神殿に行っているようで見つからなかったらしい。

そんなこんなで、真夜中のノーフォーク邸は僅かな隙を見せてしまった。

『…良くやったな、レーラ。』

『ありがとうございます、兄様。』

にっこりと微笑むレーラ。

『…キーラは大丈夫なのか？』

アレンが不安そうにいった。

『大丈夫ですよ。兄様に言われた通り、呪文はごくごく軽い物にしましたから。』

レーラが苦笑しながら説明する。

『…さて、警備の人数は相当に減ったはずだ。まずは伯爵の自室を調べてみるか。』

シリウスが不敵に笑った。

『…キーエス！』

シリウスが呪文を唱えると、伯爵の自室の前にいた使用人は崩れ落ちた。

『アレン、こいつを部屋の中に運んでくれ。』

『良いけど、何でだ？』

アレンが不思議そうに聞いた。

『何でつてお前……。……くつ、鍵がかかってる…アペリオ!』

シリウスが呪文を唱えるとすぐに鍵のはずれる音がした。

『…あの、アレン、この人が廊下に倒れているのを他の誰が見つけたらどうなると思いますか?』

レーラが若干呆れぎみにアレンに質問する。

『あつ。なるほどね……。』

『そういうことだ。アレン、レーラ、伯爵の部屋に入るぞ……。気を抜くなよ……。』

そういつて、シリウスは重厚な扉を開けた。

伯爵の部屋は意外にも質素な物だった。

大きめのベッドと、シンプルなデザインの机と椅子。それから壁側には本棚とクローゼット。ざっと目につく家具はこれくらいだろう

か。とても伯爵という身分の者の部屋には見えないほどだ。

『何というか……。殺風景な部屋だな……。』

シリウスが少し顔をしかめながらいった。

『はい……。もう少し飾り気があってもよさそうですが……。』

『うん……。何だか意外だね。この邸の他の部屋は凄く豪華なのに……』

アレンも少し意外に思ったようだった。

他の部屋には当たり前前の様に絵画や彫刻が飾られており、さらには魔法具の中でも極めて高価な魔剣までもが飾られている部屋まであった。

『……まあ、人は見かけによらないというし……。じゃあ、2人とも何か有益な物を見つけたらしらせてくれ。』

『はい、兄様。』

『わかった。』

『……えっと、これは写真かな？』

捜査を初めて暫くたった頃だった。アレンが話しかけてきた。

『何だ？ アレン。』

『どうしたんですか？』

『いや、ちょっと気になったただけなんだけど……。この写真に写っている人なんだけど……。誰なのかなと思って。』

アレンが見せた写真には2人の男女が写っていた。どちらも金髪で、幸せそうに微笑んでいる。

『まあ！綺麗な人ですね……。』

レーラが感嘆の声をあげた。写真に写っている少女は美しい金の髪に真っ白な肌、軽く桃色に染まった頬、落ち着いた銀色の瞳。まるで童話に登場する妖精のように可愛らしく、美しかった。

『俺もこの女性さ知らないが……。こっちの男は伯爵じゃないのか？』

『あつ！』

シリウスのいう通り、写真の青年は金髪に碧眼の美しい容姿をしていた。伯爵と同じである。

『じゃあ、この人（写真の女性）は伯爵の奥様なのかな？』

『ああ…。そうかもしれないな。伯爵の奥方様は亡くなられている
そうだからな…。』

『そうなのですか…。』

レーラが悲しそうに呟く。

『…これ以上、調べてもあまり意味はなさそうだな。』

かれこれ1時間近くも探している。そろそろ自分達の部屋に戻るべきだろう。

『特に気になるものはなかったな…。』

『そうだね…。でもまだ伯爵が白だと確定したわけじゃないから…。
』

『ええ、油断は禁物ですね。』

3人はため息をついた。

『それじゃあ、部屋に戻……。レーラ、アレン、部屋に戻るの
少し延期だ。……多分、証拠が見つかった。』

シリウスの視線をおつてみると、そこには先ほどの写真があった。

『どういふことですか？。』

『…この写真が鍵だ。』

そういうと、シリウスは写真を手に取り、本棚に押し付けた。

すると、本棚が消え失せ、そこには今まで隠れていた通路が現れた。

『どうしてわかったんだ？』

アレンとレーラが驚きの表情を向けた。

『いや…。何となくなんだが…。この写真があまりに不自然だったから——かな。』

シリウスにしては歯切れの悪い答えだった。

『どういうことですか？』

『いや…。その写真と本棚から変な魔力を感じたんだ。』

『私は何も感じませんでした…。アレンは？』

『いや、俺も特に何も……。』

アレンも怪訝そうな顔をした。基本的にシリウスは理論を中心に考える。こんな風に「何となく」などという理由を口にするようなことなど滅多にない。

『俺も何故だかはわからないんだが…。』

『…とりあえず、すみましようか。ここで立ち止まっても仕方がありませんし。』

レーラが提案した。シリウスは何か不可解なことを感じるらしく、考え込んでおり、何も答えない。というか、聞こえていないようだ。これも、シリウスにしては珍しい。

『シリウス！ 先に進むよ！』

『ッ…。あ、ああ。わかった。』

シリウスは我に返ったように返事をした。

『シリウス兄様、このことは後程考えましょう？』

レーラが心配そうにいった。

『…ああ、そうだな。レーラのいう通りだ。』

シリウスがやっと微笑んだ。

『ここで立ち止まっている意味はない。さつさと終わらせるぞ。』

いつもの自信にみちあふれた表情と声音に戻っていた。流石にこの状態でのんきに考え事をするなどというお気楽なことをするつもりはないらしい。

レーラとアレンはほっと胸を撫で下ろした。

シリウスはこの中で1番魔法に長けていて、頭も良い。シリウスが使い物にならないのは正直にいつてかなり困る。

『はい、兄様。』

レーラがにこっと微笑みを返した。

その時だった。

3人の身体が急に動かなくなった。一瞬のことだった。魔法をかけられたのだと気づいたがもう遅い。魔法を破ろうと懸命に魔力を集中させるが、呪文はびくともしない。

そして、通路から誰かの声が聞こえてきた。

『やっぱり見つかったじゃないですか、ミラさん。』

『別に良いじゃないっ！他の人間ならともかく、エーデルのお姫様だったんだから！どうせこの後に会いに行く予定だったんだから、向こうから来てくれてよかったじゃないっ！』

『……そういう問題じゃありません……。』

『何よ！ラストは文句があるの！？』

『……。』

『何よ！？その思いっきり見下した目はーッ！？あんたのそういう所がムカつくのよっ！』

『…別に見下してる訳じゃありません。』

ラストと呼ばれた少年は呆れたようにいった。

『ああっ！もうあんたと話すと疲れるわ！』

『…同感です。…では、この人達には暫く眠ってもらいますね……。キーエス……。』

ラストが軽く手を振ると、急激な睡魔が襲ってきた。必死に抵抗したが――抵抗も虚しく、3人の意識は闇にのまれた。

第25話 レガリス

「あつ。目を覚ましたみたいですね…。」

シリウスが意識を取り戻すと、先ほど自分達に魔法をかけた少年がいた。

…それと、横には気持ち良さそうに爆睡中のアレンも。

「……。」

なんというか、こいつはどこまで大物なのだろうか。

「…怯えなくても大丈夫ですよ？ 僕たちはレーラ・エーデルさんさえ手に入れられれば良いんですから。…おとなしくしてさえいてくれれば貴女方に危害を加えるつもりはありませんから。」

少年はシリウスの沈黙を怯えと勘違いしたようだった。白い髪に漆黒の目の美しい少年が少しだけ微笑んでみせた。

シリウスは素早く自分とアレンの状況を考えた。この部屋には自分とアレン、そしてこの少年だけのようだった。レーラと先ほどの赤い髪の少女はいない。自分もアレンも腕に魔法具と思われる手錠をはめられていた。赤く小さな魔法石が埋め込まれていて、簡単には破れそうにない。それに、目の前のこの少年（少年といってもシリウスと同じ位の年の様だが）は相当の術師のようだった。仮にも、自分とレーラ、アレンはLevel 1の地位を持つ、国内トップクラスの学校の生徒なのである。大人の魔法使いであっても、自分達3人を一瞬で手玉にとるなどということはかなり難しいだろう。そ

れをあつさりと魔法をかけてみせたのである。この少年はたしかに最強クラスの魔法使いなのだ。…美しい外見からはとてもそうは見えないが。

『…レーラはどこでしょうか?』

シリウスは冷たい声で少年に問う。

『…ああ、レーラさんならミラさんと隣の部屋ですよ?…あつ、ミラさんっていう方はさっきいた赤い髪の五月蠅い人のことです。』

あつさりと少年が答える。

『…それより、僕も質問しても良いですか?』

今度は少年が質問してきた。少年はシリウスの返事を待たずに続ける。

『…もしかして、シリウス様、ですか?』

思わず、シリウスは目を見開いた。

『貴女方は何をするつもりなのですか…?』

レーラは静かにミラに質問する。さっきまでの混乱はもうおさまっていた。レーラもシリウスの妹で公爵家令嬢という立場にある。普段は可憐な少女として振る舞っているレーラだが、この程度のこと
で怯えるほど柔ではない。

『秘密よ。』

ミラはにっこりと微笑んだ。

『…質問を変えます。貴女方の組織名は？』

レーラは綺麗な顔をしかめながらさらに質問した。

『なんだか、普通は私が質問する側なんだとおもっただけ……。でもまあ、それくらいいいわ。私たちは「レガリス」よ。』

少女は気安く答えてくれた。「レガリス」…。どこかで聞いたことのある名前だ。思い出せないくらい遠い昔に。

『…これから、私をどうするつもりですか？』

『それも秘密よ。というか、貴女、自分が捕まっているって自覚はないの？』

ミラは呆れたようにいう。

『逆賊ごとき、恐れるに足りませんわ。』

レーラにしては珍しく、吐き捨てるようにいった。

『あははっ！ シエラ様が聞いたら凄く怒りそうな言葉ね！』

ミラは心底可笑しそうに笑った。

『…シエラとは誰です？』

『知りたい？』

ミラはレーラに凄みのある微笑をむけた。

『この国の唯一の王者で最も神に近い私たちの主よ。』

『…もしかして、シリウス様、ですか？』

少年——ラストがさりとった。

シリウスはその瞬間、己の魔力の全てを開放し、手錠を破ると、ラストの腰にあった魔剣を奪い取り、目にも留まらぬ速さでラストの首筋におしあてた。

『…何故わかった？』

シリウスは白く輝く魔剣をそのまま、ラストの首筋におしあてなが

ら質問する。シリウスは現在、目の色を変えていて、さらに女の格好をしている。いくらレーラに似ているとはいえ、「シリウス・エーデル」だと気づく者は舞踏会にもいなかった。シルバーパレスの貴族達やノーフォーク伯爵ですら気づかなかったのに。

『…いえ、何となくですよ？』

ラストは笑っていった。魔剣をおしあてられているというのに、その瞳き恐怖の色はない。

『…アレン、起きろ。』

シリウスは傍で寝ているアレンの背中を蹴飛ばした。

『ッ！！！痛いッ！！！』

アレンが悲鳴をあげた。

『何するんだ、シリウスッ！』

涙目で恨めしげな声音でいう。

『俺は、この状況で暢気に爆睡できる、お前を心底感心する。』

シリウスが呆れた顔をした。

『さあ、お前にはしゃべってもらつ事がいろいろあるからな…。』

シリウスは視線をラストに戻した。魔剣を一層強くおしあてる。

その瞬間、ラストの身体が消失した。いや、消失したのではない。ただ、まるで光のように素早い動きでシリウスの剣から逃れただけだ。

ラストは少し距離をおくと、空中からどこからともなく赤く輝く魔剣を取り出した。

『ッ！』

シリウスとアレンは驚愕した。これほどまで素早い動きをする人間は見たこともない。自分達とて、戦闘訓練はそれなりに受けているのに、反応することすらできなかったのだ。

『…あの。』

言葉を失ったシリウスとアレンにおずおずとラストが話しかける。

『…えっと。お友だちになりませんか？』

この言葉は、これまで聞いたどの言葉よりも、この状況に不適切ではないか——とシリウスとアレンは思った。

第26話 ラスト

シリウスはアレンの手錠を魔剣で素早く壊した。
相当の魔力をこめたらしく、手錠はあっさりと壊れた。

『ありがとう…シリウス。』

『いや…』

シリウスとアレンはすぐに視線をラストに戻す。たしか、自分達はここで奇妙な言葉を耳にした気がする。

『……』

『あ……。お友だちになるには自己紹介が必要ですね。…ラスト・レガリスです。えっと…他に何を言えば良いのでしょうか？』

ラストは優雅にお辞儀をすると、可愛らしく、困ったように首を傾げて聞いてきた。

どうやら、さっきの言葉は聞き違いではなかったらしい。

『…えー、つまり、君は俺たちと敵対するつもりはない——ってことかな？』

硬直したまま動かないシリウスにかわって、アレンが質問した。

『…あつ、はい。もっとも「今は」ですが…。僕は無意味な戦いが嫌いですから。』

理解してくれて嬉しい、と言うようにラストはにっこりと笑い、両手を広げた。

『…シリウス？』

アレンはおそろおそろシリウスに話しかけた。こういう予想外の出来事に若干弱いシリウスは暫く呆然としていたが、すぐに真剣な表情を取り戻す。

『…お前の言葉など信じられるはずないだろう。だいたい、そんな魔剣を持っていてよくもそんなセリフが吐けるものだな。』

シリウスはラストの左腕にある禍々しい朱に輝く魔剣を見ながら呟く。

『…ああ、ごめんなさい。でも、貴方だって持つてるじゃないですか。……僕の魔剣を。』

ラストは最後の言葉を悔しそうにいった。

『当たり前だ。お前が信用できるといふ証拠がない。第一、お前は何故戦闘を避けようとするんだ？』

シリウスの疑問はもつともだ。先ほどのラストの動きは達人といっても良いほどに洗練されていた。自分達2人を相手にしてもラストの顔に焦りの色はなく、むしろ余裕そうな表情をしている。他人の嘘には敏感なシリウスにはその表情が嘘ではないことがわかった。しかし、先ほどラストは「今は」と限定した。それは「後」は敵対する、といっていることと同じだ。信用できるはずがない。

『…さつきも言いましたが、僕は無用な争いは嫌いなんです。僕は血を見て喜ぶ殺人鬼じゃないんで。あと、「今は」といったのはシエラさん次第ですね。…個人的には敵対なんてごめんですが…。』

少し顔をしかめながら盛大にため息をついた。

『シエラ？ シエラとは誰だ？』

『…僕達の主です。』

こんどは思いつきり顔をしかめた。可愛い顔が台無しだった。

『…お前達は何故俺達を狙う？』

『…まだ秘密です。』

シリウスが鋭い視線を向けるがラストはそれを真っ向からうけとめた。

先に視線を外したのはシリウスだった。

『ふん…。』

シリウスはアレンに向き直る。

『アレン、こいつからは特に何も情報が得られそうにない。…他をあたるぞ。』

『えっ！…シリウス、僕達の前には一応敵のラスト君がいるんだけど…？』

『…どうぞご自由に。』

苦笑しながら道をあけるラスト。

『…とりあえず、こいつは嘘はいつていないようだからな。「今は敵対しない。こいつにそれでどんなメリットがあるのかは不明だが…。「敵対」しないと俺達がなにをしようが口出ししないということだ。』

シリウスが軽く笑う。このアジトにきてからは初めての笑顔だ。

『…仰る通りです。』

ラストもつられて軽く笑う。

『…ただし、レーラさんと一緒にいるミラさんについては知りませんから。そちらは貴殿方で何とかして下さい。』

『…何となくだが、お前の立場が見えてきた気がするな。お前、仲間の中では浮いてるだろうな…。』

『浮いてるって…。何だかストレートに言われるとショックですね……まあ、否定はしません。』

苦笑いするラスト。

『…レーラさんのいる部屋は隣と言いましたが…詳しくは右の部屋

ですから。』

そういうとラストは小さな声で何かを呟いた。すると一瞬で消失してしまった。

(…また、いつかお会いしましょう。)

最後にどこからともなくそんな声が聞こえた。

『さて、レーラの所に行くか。』

シリウスはラストの消えた場所を忌々しげに一瞥すると、アレンに向き直った。

『うん。それにしても…、転移の魔法まで軽々しく使っちゃうなんて…。シリウス、何か僕達とんでもない敵を相手にしてる気がするんだけど…。?』

『…まあな。だが向こうからくるんだから仕方ないだろう。』

『そうなんだけどさ。』

『たいして情報が得られなかったのは痛いけど…多分、俺達が何をし

てもあいつは口を割らなかつただろうしな。魔法の技量もかなり高かつたようだし。』

シリウスは軽く笑う。

『…何か珍しいな。お前が敵を誉めるなんて。』

アレンはシリウスが敵を誉めることを聞いたことがなかつた。というか、こいつが他の人間を誉めること事態滅多にない。

『別に…。ただ、人間的には嫌いじゃないよ、ああいう奴。自分の意志で動いている。人形には面白味がないからな。』

『ふーん…。ああ、レーラに報告しないとな…。』

『？ 何をだ？』

『決まってるじゃないか。』

アレンがニヤリと笑う。猛烈に嫌な予感がするシリウス。

『シリウスに好きな人が出来たつて。レーラは悲しむね。大丈夫、俺は応援してるから！！』

『なっ！誰がッ！あんな奴を好きだといった覚えはないぞ！』

真っ赤になつて反論するシリウス。

『えー、「嫌いじゃない」んでしょ？』

アレンがいつそう深く微笑む。

『たしかに言ったが…ッ！「嫌いじゃない」＝「好き」とは限らないだろう！』

『えっ…。シリウスがこんなにむきになるなんて…。まさか本当に…？』

アレンは恐怖の表情を浮かべる。内心では大笑いしていたが。

『だから違うといっているだろうがッ！』

『ははっ、シリウス。冗談だよ。というか、そんなに大声だと他の部屋にも聞こえちゃうんじゃないのか？』

『お前が言わせただろうッ！』

シリウスはそこで目を閉じて深呼吸した。どうやら、気持ちを落ち着けているらしい。

からかいたくなかったが、今日はここまでにしておこう。

『あははっ！まあとにかく、レーラを迎えに行かなくちゃね。さっさと行くぞ、シリウス。』

『……後で覚えておけよ、アレン。』

小声でシリウスが言う。

『え？ 何か言った？』

『いや、特に何も言っていないが?』

にっこりと天使の微笑みを浮かべて言うシリウス。正直な話、その笑顔は非常に怖かった。

これは…

少々やり過ぎたかも知れない。

若干、シリウスをからかいすぎた自分を呪うアレンだった。

第27話 ミラの實力

（…貴女…は何をす…つも…ですか？）

『うーん…シリウス、少し、いや、かなり聞こえずらいかな？』

アレンはシリウスを怒らせないように、控えめに、しかしはっきりと
いった。

『…文句を言うな。隣の部屋とはいえ、離れた場所の盗聴は難しい
んだ。それに、盗聴できるだけありがたいとおもえ。』

シリウスは苛立ちを出来る限り抑えた（本人は精一杯抑えたつもり）
声音で答えた。

現在、シリウスとアレンは隣の部屋にいるレーラとミラ（とやら）
の会話を盗聴中である。シリウスの手には緑色の魔法石があり、微
かな光を放っている。

『そりゃあ、シリウスが魔法石を持ってたことは凄く助かったと思
ってるさ。ただ、もう少し力の強い石はなかったのか？』

『…しょうがないだろう。あまり力の強い石だと敵…あのラスト
とかいうガキは特にだな…気づかれる恐れがあったからな。』

シリウスはラストを「ガキ」扱いしたが、大して年は変わらなかつ
たようにアレンは思う。せいぜい、1〜2才程度だと思う。

『…あ、そうだ！シリウス、前に伯爵にしてみたいに監視することはできないのか？』

アレンは期待を込めたようにいった。

『…前に伯爵を監視することができたのは事前に伯爵に呪文を仕込むことが出来たからだ。普通、他人を監視したり盗聴することは簡単にはできないんだよ。』

『…じゃあ、今はどういう原理で盗聴してるんだ？』

アレンが聞くと、何故かシリウスは少しうんざりした顔をした。

『…本気で聞いているのか？』

『は？』

アレンは首をひねった。シリウスの言っていることの意味がわからなかったからだ。そんなに聞くのが不味い質問だったのだろうか？

『…4日前、学校の魔法基礎の授業で習ったばかりの「基本的な魔法石の力の原理」の応用だ。』

…記憶にあるような、ないような。

『…………。』

アレンは曖昧に微笑んだ。

『…………お前な。…………まあ、今はいい。後で説明してやるから、黙っ

て聞いている。』

シリウスがため息をついた。…これは、後で大変なことになる予感がする。

『ほら、シリウス。レーラが何か言ってるよ?』

『お前は……。』

シリウスが何か言いかけたが、途中で頭をふってやめた。とりあえず、レーラの方が重要だと判断したらしい。

(質問…変え…す。貴女…の組織名は?)

(…れ…らいな…いいわよ。私た…はレガ…スよ。)

『アレン、今のを聞いたか?』

シリウスがやや驚いたように、しかし嬉しそうにニヤリと笑った。

『ゴメン、シリウス。俺、聞こえずらくてあんまり聞けなかったんだけど。』

アレンは正直に答えた。

『…レーラがこいつらの組織名を聞いたんだ。そしたら、この女、^{ミラ}何て答えたと思う?』

『えーと…。レガ…ス?』

『まあ、そこは聞き取りずらかったからな。「レガリス」って答えたんだよ。ラストは名乗っていたな？自分の名前は「ラスト・レガリス」だと。』

『あ！あいつのファミリーネーム！』

『それが本当の名かは知らんが…。「レガリス」。この言葉が何らかのキーになっている可能性が高いだろう？』

『なるほどな…。』

アレンが納得したような顔になった。

『帰ったらこの言葉について徹底的にしらべるぞ。何か情報があるかもしれないからな。』

レーラとミラの会話はまだ続いているようだった。レーラが質問してミラが答える、といったスタンスの様だった。というか、普通は立場が逆じゃないだろうか。

（シエラとは誰です？）

雑音が入っていたが、今度の声は良く聞き取れた。

（…知りたい？…この国の唯一の王者で最も神に近い私たちの主よ。…さあ、そろそろ…）

そこでミラは声の質をガラリと変えた。それまでの友好的な声音ではなく、凍てついた氷の刃のように冷たい声だった。

（私たちの会話を盗み聞きしてるお行儀の悪い子たちにお仕置きしなきゃ——ね。）

シリウスとアレンに悪寒が走った。2人は反射的に立ち上がり、飛び退くように壁から離れた。その瞬間、大きな爆発音とともに右の壁が破壊された。煙の中に見えるのは赤いマントを着た、赤い髪に緑の目の勝ち気な表情をした少女。

『…はあ、貴女達がそんなに優秀だとは思ってもいなかったわ。それにラストだったら！お客様を放っておくなんて…後でシエラ様に報告してやるんだから！』

少女は忌々しそうに言った。

『…レーラ！！』

シリウスの視線をたどってみると、先ほどの自分達と同じような手錠で拘束されたレーラがいた。

『無事だったか？』

『はい、私は大丈夫です。』

レーラが天使の様な笑顔を向けた。

『…勝手に喋らないでくださるかしら？貴女達、状況わかっているの？』

少女は呆れたような顔をした。

『わかっていないのはそちらじゃないのか？ミラ…だな？お前こそ俺達と一緒に来てもらうぞ。』

シリウスが不敵に笑う。

『…まったく、口の悪いお嬢様ね。それにしても、ラストは私の名前までしゃべったの？はあ…貴女方には用がないから傷つけたくはないんだけど…。このさいしょうがないわよね。』

ミラも不敵に笑いながら真つ赤な舌で唇をなぞった。ラストとは違い、極めて好戦的な性格らしい。

両手で空中から何かを掴むような動きをした。すると、空間が切り裂かれたような現象が起こり細身の、赤く輝く魔剣が2本現れた。

『2刀流！？』

『ふふっ！』

ミラは軽く笑うと、何を思ったのかもう一本赤い魔剣を空中から取り出すとアレンに放り投げた。

『うわっ！』

アレンは何とか怪我をせずに掴むことができた。

『1人だけ武器を持っていないのは可哀想でしょ？何なら、レーラさんも混ぜてもいいわよ。…そんな手錠くらい、簡単に壊せるんでしょう？』

ミラの言葉に目を丸くしたレーラだったが、すぐに険しい表情になり、手錠を壊し、シリウスの隣に立った。

『…レーラ、お前は後方から魔法での援護を頼む。』

『はい。わかりました。』

『…アレンは俺と一緒に剣の相手をするぞ。いいか、必ず仕留めるぞ。』

『はあ…、結構強そうな人なんだけど。まあ、出来る限り頑張るよ。』

アレンはため息をついたが、すぐに真剣な顔つきになった。

『久々に楽しめそうだね。』

ミラが嬉しそうに笑った。

『…行くぞッ!!』

シリウスの声が切っ掛けとなり、戦闘が始まった。

レーラがすぐさま呪文を唱え始め、シリウスとアレンは剣を構え、ミラに向かって疾走した。

『ファイアー・ストームッ!』

レーラが産み出した莫大な炎がミラを襲う。

しかし、ミラが魔剣を振りかざすと、薄く透明な障壁が現れ、レー

ラの魔法を防いでしまった。だが、この程度はシリウスの計算の内だ。

ミラが防御のために自分達から意識をそらしている間に、シリウスはミラの間合いに一気に入り込み、容赦のない斬撃を放った。

しかし、その斬撃はミラの腕を掠めるも、傷は嘘のように消えていった。シリウスは目を見張った。驚異的な治癒能力である。ミラは優雅に微笑むと、軽々しくシリウスの放った斬撃を受け止め、すぐに2本目の魔剣で反撃してくる。ミラの斬撃は信じられないほど重く、腕を痺れさせた。シリウスもアレンも必死になってそれかわす。最初は攻撃することが出来ていたが、徐々にこちらの動きを読まれてきたらしく、今ではこちらは防御するのが精一杯になっていた。レーラの魔法での援護がなければとくに勝負が着いていただろう。

『くっ！』

遂にミラの魔剣がシリウスの右腕をとらえた。

『シリウスッ！！』

『兄様ッ！！』

アレンとレーラが叫ぶ。シリウスの右腕からは大量の血が溢れていた。

『…ッ！！アレンッ！よそ見をするなッ！！』

慌ててアレンがミラに向き直ると、すでにミラは自分の眼前に迫っ

ていた。アレンはミラの霞むような斬撃をほとんど直感によって受け止める。反撃を考えているような時間はなく、受け止めるだけでも精一杯だ。アレンは耐えきれずに背後に飛ぶ。すぐに追撃がくると思ったが、なぜかミラは追撃をかけなかった。面白がるように自分達を観察しているだけである。

『まさかとは思うんだけど…、貴女、「シリウス・エーデル」？その女の子も「シリウス」って呼んでたし、レーラさんも「兄様」って呼んでたものね。』

ミラが愉快そうに笑った。

『…お前には関係ないだろう。コールド・インスピレーション！』

シリウスは辛そうな顔をしながらも、得意の氷系上級呪文でミラを攻撃した。

ミラはそれをかるくかわし、一気にアレンと間合いをつける。

『アレンッ！ファイアー・インベルッ！！』

レーラが青い炎の雨をふらし、アレンとミラとの間合いを開けようとする。

『甘いっ！』

ミラが魔剣を振りかざすとみるみるうちに炎が消えていく。

『そんなッ！』

そして、アレンに向かって魔剣を降り下ろした。

『アレンッ！！』

アレンはなんとか魔剣を受け止めたものの、ミラの力をそのまま受けることができず、背後に飛ぶ。

『あははっ！貴女はその年にしてはよくやるわ！…もしかして、貴女も男の子なのかしら？』

ミラはまだまだ余裕そうで、にっこりと笑いながら質問してきた。対してこちらは、腕を攻撃されて自分は口々に動くことができず、アレンの体力ももう長くは持たないだろう。レーラも大量の魔力を消費していて疲れを隠しきれていない。

『どっちでも良いでしょう？』

『…まあ、勝負に性別は関係ないけどね…。でも、貴殿方もそろそろ疲れてきたみたいだし、そろそろ終わらせましょうか。』

ミラはまるで風のようなスピードで再びアレンの間合いに入った。赤く輝く斬撃が雨のようにアレンに降り注ぐ。

必死に避けるがついには避けきれずに頬を切り裂かれる。痛みに一瞬だが目を瞑ってしまった。次の瞬間、アレンは強烈な回し蹴りを腹に食らってしまい、地面に叩きつけられてしまった。

『…3人とも、もうこれまでにしたら？私も何だか弱いものいじめみたいで嫌だし。捕まってもそこまで酷いことはシエラ様もしいと思うわよ？』

ミラはにこやかに微笑みながらいった。

しかし、その言葉が嘘だということはシリウスにも、そしてレーラやアレンにも理解できた。仮にも3人はシルバーパレスの人間だ。光の影でさまざまな陰謀が蠢く町で育った3人は他人の嘘にはやすやすとは騙されない。

『…俺達はお前達に捕まる気はない。』

シリウスが苦し気に、しかしはつきりと言葉を紡いだ。

『はあ……悪いけど、それは俺もだ。』

『…私もです。貴女に屈する気はありません。』

アレンとレーラもいった。

それを見て、なぜかミラは嬉しそうに微笑んだ。

『さすがね……。まあ、それくらいじゃないとシエラ様とは争えないわね。』

『…お前の言っている意味はわかりかねるが……。だが、俺達はお前の強さは認める。俺達では「まだ」お前には勝てない。』

『あら…なんだか弱気ね?』

『…別に事実を言ったただけだ。それに、最終的な勝利を逃すつもりはない。』

『あら、どういうことかしら?』

ミラが静かに問い返した。

『…油断したな、ミラ。お前は確かに強いが、俺達の方が戦略は上だったってことだ。』

『…どういうことかしらッ!』

ミラがシリウスとの間合いを詰めようとする。シリウスの発言に何か不穏な空気を感じ取ったのだろう。
だが…

『…ッ!!これって!!』

ミラの体に白く輝く鎖のようなものがまとわりついており、体を動かすことが出来なくなっていた。

『貴女に剣技では勝てないとわかった時からこの捕縛陣を作っていたんですよ。』

シリウスはミラの剣技が自分達では敵わないものだと思ったときからレーラに捕縛陣を作るように頼んだのである。ミラに悟らせないよう、極力魔力を抑えたテレパシーでレーラとアレンに作戦を伝え、自分とアレンはミラと必死に戦っている演技をしていたのである。もともと全力で戦ったのは本当だが。

レーラには怪しまれないよう、途中で援護魔法を行使してもらいながら、この捕縛陣を作ってもらったのだ。

『…でも、この陣は長くは持たないわ。』

ミラが笑う。ミラが陣を破るまでの短時間でシリウス達がミラを倒すことは不可能だろう。先ほどの治癒能力をみるかぎり、この短時間で倒すことは体力と魔力を消費した3人には厳しい。

『知っている。』

『うん、君の回復力は凄かったからね。シリウスのつけた傷があったというまに消えちゃったし。』

シリウスは地面に突っ伏していたアレンに手かした。

『兄様、アレン。準備ができました。』

『ありがとう、レーラ。』

『本当に助かったよ。』

3人は笑いあう。

『レーラ、状況のわかっていないミラに説明してあげたらどうだ？』

『はい。』

シリウスとレーラが微笑みあう。同じ黒髪黒目の美しい2人が微笑みあう姿は神々しいまでに美しかった。

『捕縛陣を作ったわけは、魔力の消費が著しく、集中力が続かない中で、転移の魔法を使う時間を稼ぐため、です。』

『さようなら。』

その瞬間、薄い金色の光が3人を包み込んだ。

ミラが慌てて陣を破り、止めようとしたが。

3人の姿はもうどこにもなかった。

第28話 シエラの夢

(……ここは何処だ?)

シリウスの前に広がっている景色は何処かの町のようにだった。それは見たこともないほど豪華な町で、活気に溢れていた。シリウスがいる場所はどこかの邸のバルコニーのような所だった。下の町をみおろすと、屋根が白の建物が多く並んでいた。美しく整備された町。この大陸で権勢を誇るアビリティ帝国首都、「シルバーパレス」ですら、華美さにおいては負けるかもしれないほど。

(…初めまして。いえ、正確には違いますけど。)

シリウスの前にはいつの間にか1人の美しい少女が立っていた。年はシリウスとそれほど変わらないだろう。煌めく白銀の髪に漆黒の瞳。真っ白で透き通るような肌。そして豪華な薄い金色のドレス。少女はシリウスに向かって親しげに微笑んだが、あいにくシリウスには見覚えがなかった。

(……。)

(ここが、何処だかわからない——という顔ですね。)

少女が苦笑した。

(…それもあるが、お前は誰だ?)

(あら、私としたことが……。ごめんなさい。我が名はシエラ。シエラ・レガリス。)

少女——シエラは優雅にドレスの裾を掴み軽く低頭した。

（貴方のお名前をお聞きしてもよろしいかしら？）

シエラは神々しいまでの笑みを向ける。

（…俺の名など、お前は既に知っているだろうに。）

シリウスは皮肉を込めた口調でいった。

「シエラ・レガリス」

ラストやミラの主。

しかし、不思議とシリウスに驚きや恐怖、焦りといった感情は生まれなかった。

（貴方の口から聞きたいんです。ダメですか…？）

シエラが悲しそうにそうにいった。

（…シリウス・エーデル。）

シリウスはそれを見て顔をしかめながら名乗った。不快に思ったから——ではない。慌てたからだ。シエラが嘘をついていなく、本心から悲しい顔をしていると、わかってしまったからだ。ただ、何故かは知らないが、その感情を決してシエラに悟らせたくなかった。だから不機嫌そうな表情と声音になってしまったというだけだった。

シエラはシリウスの名を聞くと、パツと顔を輝かせた。先ほどまでの、神々しいまでの美しい表情とは違い、年相応の可愛い表情だった。おそらく、さっきまでの顔が彼女の素というわけではなく、本当の顔は今の顔に近いのだろう。

（シリウス——とお呼びしても良いですか？）

（…かまわない。）

（…そのかわり、なんですけど、私のことも「シエラ」と呼んでくださいね。）

シエラは上目遣いで、恥ずかしそうにいった。おそらく、相当に恥ずかしかったのだろう。うつすらと頬が赤くなっていた。

（…わかった。）

シリウスが険しかった顔を和らげ、軽く笑いながらいった。シエラの表情が演技ではないことは明白だった。

シリウスは内心、シエラのことを敵と見ることが出来なくなっていた。敵のトップだということは理解出来るが、何故か警戒する気にはなれなかったのだ。シリウスは「シエラがシルバーパレスでの事件やドラゴンパレスの神殿を襲撃した組織の長である」という事実を忘れそうになるほどに、シエラという存在に吸い込まれてしまいそうだった。

（シリウスはここが何処だか知りたいんですよね？）

シエラが笑顔を向けた。

シリウスは顔を向けるとシエラと瞳がバッチリあってしまった。自分やレーラと同じ漆黒の瞳。その瞳はどこまでも清みきっていて、神秘的でいて、

——とてつもない魔力が宿っていた。

力の強い魔法使いなら、呼吸をするように魔力を感じとることが出来る。魔力は隠すことも可能だが、諜報活動などをする者以外はほとんどの人間が魔力を隠すということはしない。魔力を隠すにはそれなりの魔力で押さえ込まなければならないからだ。それでも完全に魔力の気配を消すことは殆ど不可能で、無駄な魔力の消費となってしまう。特に貴族階級や富裕層は魔力を隠す者など滅多にいない。自らの実力を示すことができ、強力な魔法使いなら爵位や様々な特権が与えられることもあるからだ。

シリウスはシエラの魔力に内心、舌を巻いていた。おそらく、魔力の保有量だけなら自分やレーラとそれほど変わらないだろう。しかし、彼女の奥に魔力とともに眠る強大なプレッシャーにシリウスは驚いたのだ。

恐怖ではなく、純粹な驚き。

普通の人間ならば震えて何も言えなくなるであろう存在だが、シリウスにとっては「凄いな。」と感じさせられる程度だった。

（…ああ。俺にとっては見覚えのない土地だからな。）

シリウスがそう答えると、シエラはさもおかしそいに笑いながらいった。

（いえ、ここはシリウスと私の精神世界の間に作った場所です。簡単にいうと、私とシリウスが共通の夢を見ているといった感じです。

）

（…では、この景色は現実には存在しないのか？）

（いいえ、ちゃんと存在した場所ですよ？シリウスもよく知っている場所です。）

シエラはいたずらっぽく笑う。

（そうなのか？）

シリウスは回りの景色をじっくりと眺めてみた。北の方には城のような物が大小2つあるようだった。小さな城の後ろに大きな城が見える。どちらも真つ白な城だった。小さな城を囲むように円形に建物が形成されているようだ。大きな方の城を囲む城壁の上層部には色とりどりの巨大な魔法石が大量に埋め込まれている。ちょっとやさつとの軍勢ではあれを破ることはできないだろう。城下町にはたくさん住宅が並んでおり、この国の繁栄が写し出されていた。そして、町を囲むようにして、さらに壁があつた。この国に攻めいる軍勢はこの2重の壁に苦しめられることになるだろう。

町の外に目をむけると、広大な自然に目を奪われた。天にも届きそうな高い山がいくつも並んでおり、見るものを圧倒させる。その下には緑の森林が広がっており、晴れ渡った空とのコントラストが非常に美しい。

（…やはり俺には見覚えがないな。）

シリウスは断言した。こんな景色を見たら絶対に忘れる筈がないと思う。

もともとシリウスの記憶力は非常に優れている。あまり物忘れをす

るような性格ではない。

（本当に？）

シエラは年を押すように聞いた。

それをきき、シリウスはもう一度町を眺めた。

やはり、覚えがないようだ——と答えようとしたが、突如シリウスの頭に軽い衝撃がはしった。

（まさか……。シルバーパレス？）

シリウスは目を見張った。城壁に町を隔てる壁。そしてあの2つの白は小さな方が神殿、大きな方が王宮。全て方角が一致している。

しかし、シリウスには信じられなかった。似ている部分はこれだけで、他はあまり似ていない。第一、シリウスの知るシルバーパレスはこんなに小さな町ではない。この町の約2倍の大きさはあるだろう。そして、貴族階級と平民階級の暮らす地域が区別されている。貴族達は東側の地域に、平民達は西側の地域に住んでいる。シルバーパレスに住む者は皆裕福な者ばかりで治安も良いが、貴族達の中には平民を毛嫌いしている者達もいる。魔法の才能は血に左右されることが大半だ。貴族は比較的魔法の才能のある者が多いゆえ、そのため「選民思想」を抱き、魔法の使えない平民達を差別する貴族も少なくない。そのため、シルバーパレスの東側では広い土地を所有する貴族や富裕層の邸宅が多く、自然が多い（各家庭に広い庭があるため）。

一方、西側は静かな東側とは違ってかわって、活気に溢れた町となっていた。小さな家がいくつも密集しており、賑やかさを感じさせる。しかしこの町にはそんな風に別れているのではなく、平民も貴族も同じ場所に住んでいるようだった。様々な形や大きさの家が入

り乱れて建っている。

そして、何より違うのは町の外の風景だ。

シリウスの知るシルバーパレスの外界はこんな風に美しくはない。外界に住む人間達（町に入れない低いlevel層の貧しい人間達）が資源を求めて荒らしてしまったり、シルバーパレスより出るゴミの廃棄処分に使われているからだ。

町を囲む壁も随分違った。シルバーパレスからは普段、外界の様子を見ることは出来ない。それは外界と町を隔てる壁が高くそびえたっているためである。町の人間も、汚れた外界の様子を好き好んでみようと考える人間は皆無に等しい。そのためシルバーパレスでは外界のことを知っている人間は極めて少ない（他の5大都市や中流階級の住む町は別にして）。

しかし、この町では少し高台にいけば外界の様子を見ることが出来る。壁はずつと低く、美しい自然を眺めることができる。

シルバーパレスで自然を楽しむには、町の北西に位置する小さな森と小さな山がある。この2つは人工的なものではあるが、それを感じさせないほど立派に作られている上、完璧に整備されているため危険はない。公園もあり、子供達の娯楽の場となっている。

しかし、それは住民（正確には臣民）の多くがこんなに美しい自然を見たことがないからだとしり우스は思った。

シルバーパレスの山や森もこの風景の前では霞んでしまっただろう。この見る者を圧倒させる迫力はシルバーパレスの人工的な山と森には決してない。そして何よりこの解放感が心地よかった。シルバーパレスには無いものだった。壁が低いというだけでこんなにも見えている景色がかわる。

（そうです！シルバーパレスなんです。良くシリウスは気づきましたね。ここは今より100年前のシルバーパレスになります。）

シエラが嬉しそうにいった。

（１００年前…。）

（はい。今のように高い壁は先代の女王、クリスティーナになってから作られたものです。ですから、壁が出来てからは５０年ほど経っているんです。）

（知らなかったな。）

（でしょう？そして、今の女王、アイリーンは在位してまだ間もないですが、母クリスティーナと同じ思想を掲げています。）

（同じ思想？）

（ええ。シリウス、貴方はこの国の階級制度について、どういう考えを持っていますか？）

（くだらないと思っている。）

シリウスは即答した。

階級制度について、全て反対していると言っわけではない。女王に対する忠誠心を無理やり押し付けられているように感じるのだ。階級は純粋に能力で決まるのではない。女王や王族に対する忠誠心も考慮されているのである。そのため実力的にはlevel3程度の者でもlevel1の地位にいるものもある。つまり、この制度は女王にとって扱いやすい（都合の良い）人間を集めるための物だ。

（ふふ。シリウスらしいですね。）

（シエラ、お前はと思うんだ？）

（あっ…。）

（？どうしたんだ？）

（やっと呼んでくれましたね。名前。）

シエラは花が咲くように可憐な笑顔を浮かべた。

照れ臭そうにシリウスはそっぽを向いた。どうも、この少女という調子が狂う。

（私がどうおもつか——ですか。）

（ああ。）

（私は——全て反対という訳ではないんです。シリウスは怒るかもしれませんが…能力ある者を優遇するのはある意味当然の断りでしょう。ただ、馬鹿馬鹿しい忠誠心の強要や町への出入りの制限はなくすべきだと考えています。）

（……。）

（あの…気を悪くされてしまいましたか？）

（いや…凄いな。）

（え…？）

シリウスは優しい笑顔を浮かべた。レーラやアレンといった親しい

者以外には決して見せない笑顔を。

（俺の考えと殆ど同じだ。）

（まあ！本当に？）

（ああ。）

（嬉しい…。）

シエラは瞳に涙を浮かべて笑う。
それを見て慌てたのはシリウスだった。

（泣くな…。俺が虐めているみたいだ。）

（あ…。ごめんなさい。ただ、嬉しくて。）

幸せそうに微笑むシエラ。

（シエラ、お前達は何を望んでいるんだ？）

（…この国の真の平和です。）

（…その為なら人を殺すことも躊躇わないと？）

シリウスの質問は随分踏み込んだ質問だった。シエラが気を悪くしてしまいかもしいれないと思ったが、聞かずにはいなれなかった。

（…はい。アイリーンにもクリスティーナにも王者の資格はありません。）

(…どういう意味だ?)

(シリウスにもいずれわかる 때가 来ますよ、必ず。)

シエラは苦しそうな顔をした。何かを抑えるような苦しい顔。

(…大丈夫か?)

(…はい。…大丈夫です。心配してくれて…ありがとう。…シリウスは優しいですね。)

ニコッと微笑む。すぐに苦しそうな笑みに変わってしまったけどその微笑みは今まで見たこの少女のどの微笑みよりも美しかった。

(…そんなことを言うのはお前とレーラくらいだな。)

(そうですねか…?でも、私にとって…シリウスと話せたことは…大きな収穫でしたわ。ミラさんに感謝しなければ…なりませんね…。)

シエラは少し落ち着いたようだった。息を少しきらしているが、もとの落ち着いた表情に戻ってきていた。

(それは俺も同じだが…。シエラはどうやって俺に魔法をかけたんだ?)

それはさっきからシリウスが疑問に思っていたことだった。この少女と現実世界で会ったことなど1度もない。

(ああ、それなら簡単ですよ。ミラさんと私の間には魔法契約が成

されていて、その繋がりをつかってシリウスがミラさんと接触したときに魔法をかけさせてもらいました。）

シエラは得意げにいった。

（そんなことも出来るのか…。）

契約の繋がりを使って他者に魔法をかけるなど聞いたことがない。

（シリウスもできますよ。）

（……。）

（あつ、信じていませんね？）

（いや…その…。）

大体、どんな契約をしたらそんな真似が出来るんだ！——というのがシリウスの正直な感想である。

（できますよ、いずれ。シリウスは——ですから。）

（……？すまない、今何て言ったんだ？）

（いえ、なんでもありませんわ。）

（…まあ、良い。それと、もう1つ聞きたいことがあるんだが。）

（なんででしょう？）

シエラが小首をかしげた。

（…なぜシエラ達はシルバーパレスで俺を狙った？）

それはシリウスがあの事件からずっと抱き続けていた疑問。自分の中に現れたもう1つの人格のような存在。そのことについて。いまだに父には言い出せず、レーラやアレンにも言えなかった。

（…シリウス。貴方もレーラさんも特別な存在なんです。）

（特別？）

（…今いえることはこれだけです。）

（…そうか。わかった。）

シリウスはシエラに無理やり答えさせようとは思わなかった。それに、シエラの瞳を見ればこれ以上何もいう気はないようだった。

（…シエラ、あのラストとかいう餓鬼はお前達の組織の中でどういう存在なんだ？）

（ラスト…ですか？）

（ああ、変わり者だったからな。少し興味がわいたただけだ。）

（ふふつ。ラストですか…。魔法がすごく得意で尊敬されてますよ？ただ、すごく変わり者としても有名ですが。）

（…一応、仲間だろう？変わり者扱いして良いのか？）

（事実ですから。）

シエラがにつこりと笑った。シリウスは少しだけラストに同情した。

シエラは王宮^{おそらぐ}の方を向き、呟くようにいった。

（シリウス、貴方は私が思っていたよりもずっと優しい人でした。）

（…シエラ、そんなことを言うとアレןあたりに怒鳴りちらされるぞ。）

（ふふ。アレןはシリウスのお友達でしたね。）

（ああ。というか、よくわかったな。）

（ミラさんと戦っているのを見ました。ミラさん相手にあんなに粘るなんて凄い身体能力ですね…。）

（体力だけが取り柄だからな…。）

シリウスが優しく笑った。それを見てシエラも笑う。

（今日話せて本当に良かった…。）

シエラが優しい笑みを浮かべた。

（…さっきも言ったがそれは俺も同じだ。）

（そろそろ時間ですね…。）

（この空間を維持することができないのか？魔力なら俺のを使っても良いが…。）

（いいえ、そうではなくて、現実世界で流れる時間が心配ですから。）

シエラが笑った。

そういえば、もう話初めて1時間ほど過ぎているだろう。

（シエラ、現実世界ではどのくらいの時間が過ぎているんだ？）

（10秒にも満たないと思いますよ？ただ、あんまり反応がないと怪しまれてしまうので…。）

（なるほどな…。）

（私をもっと魔法が上手なら良かったんですけど…。）

（いや、俺も貴重な体験ができた。）

（ふふ。では…また会いましょう、シリウス。貴方に永久の幸運を。）

シエラは神々しく、しかし最初の時とは明らかに違う笑みを浮かべた。

（ああ、シエラ。また会おう。）

シリウスも優しい笑みをその美しい顔に浮かべた。そしてシリウス

は静かに瞳を閉じた。

第29話 戦闘後

「……………様っ！シリウス兄様っ！」

自分と呼ぶ声が聞こえ、シリウスが瞳を開けると、ノーフォーク家の自分達の部屋が見えた。どうやら転移は無事成功したらしい。腕の傷が痛んだが、魔力で抑えた。完全に痛みがなくなった訳ではないが、先ほどの様に酷くずきずきとするような痛みはない。痛みが弱まったところで顔をあげると、レーラとアレンが心配そうに自分を見つめていた。

「…レーラ？アレン？」

シリウスが訪ねると、2人はほっとしたような表情を浮かべた。

「良かった…。兄様、話しかけても答えないんですもの…。」

「いや、レーラ。そんなに長い時間ではなかったと思うが…。」

「でも…。」

レーラが目潤ませながらいった。艶やかな髪に真っ白できめ細やかな肌。顔のパーツもそれぞれが絶妙な位置にあり、それだけで絶世の美少女と呼ばれるのに相応しい。そして何より印象的なのは、そのかなり大きめの漆黒の瞳。神秘的なその瞳に見つめられると大抵の人間は落ち着きをなくしてしまうだろう。

「…もう大丈夫だ。心配してくれてありがとう、レーラ。」

シリウスは目を和ませて、レーラの頭を優しく撫でた。レーラはやや弱々しく、だが嬉しそうに微笑む。

『……………』

『ん？ 何だ、アレン？』

『？ アレン、どうかしましたか？』

『いや…………。何でもない。』

いつもながら、仲のよろしいことで——等と思ったが、それこそ今さらだな、と思ったからだ。したがってアレンは若干呆れた顔をするだけに止めた。

『…それはそうと、どのくらいの間…？』

シリウスはレーラに質問したのだが、答えたのはアレンだった。

『どこかのだれかさんが間抜けな顔でぼうつとしてたのかって？それはもう、たつぷりと10秒くらいかな。』

『…間抜けな顔とは誰のことを言っているんだ。』

『黒髪、黒目でひねくれた性格の上、毎回俺を振り回す奴のことだ。』

『そうか。困った奴なんだな。』

シリウスは平然と嘯いた。

『えっと…兄様、アレン。ひとまず怪我の治療をしましょう？』

レーラの言葉でシリウスとアレンは一時休戦となった。

『…それにしても、お前も酷くやられたな…』

シリウスはアレンを見て言った。

アレンはかなりの切り傷を負っていたり、戦いの激しさが感じられた。

『まあな。でも、お前ほどじゃないぞ。』

アレンが呆れたように言った。

視線はシリウスの腕に固定されていた。

腕からはまだ血こそ止まっているようだが、傷は深く、痛々しい。

『…別に、今は魔法で痛みを抑えているからな。』

シリウスは肩をすくめた。

『アレン、貴方の傷を先に治しますね。魔剣による傷とはいえ、さほど深くはないようですから。』

魔剣による傷は普通の傷より治るのが遅い。それは魔剣に宿った魔力のせいで、傷が治るのを防ごうとしているからだ。そのため、魔

剣の傷は治癒魔法が効きにくいが、幸いアレンの傷はさほど深くはないようだった。

レーラが瞳を閉じ、両の手を広げる。

『…我が盟友にして運命と強運、治癒を司る精霊ユフィリアよ…我に力を』

レーラが召喚呪文を唱えると、紫のやわらかい光が満ち、床には円形の陣が現れた。

そこから紫の精霊が光と共に現れた。

人の形をした、紫の髪と瞳をした可愛い精霊の女の子。髪や瞳と同じ紫のドレスの様な物を着ている。長い髪をなびかせながら優雅に空中を舞う。人間でいうと10歳ぐらいであろうか。

もちろん、人間と似ているといっても全てが同じというわけではない。彼女はうつすらと紫の光を放っているし、空中に浮かんでいた。それに、「精霊」なので当然実体はない。

少女の姿をした精霊はクスクスとわらいながら空中を自在に飛び回る。

『ユフィリア。』

レーラが静かにいうと、ユフィリアは飛び回るのを止めてレーラの前に優雅に舞い降りた。

レーラはアレンの手を握った。

『インクルーミス』

呪文を唱えると、ユフィリアは笑いながらアレンの中に「入った」。
すると、みるみるうちに傷が消えていった。

『ありがとう、レーラ。』

『いいえ、どういたしまして。』

レーラはにっこりと笑った。

しかし、魔力を消費していたので、中位精霊であるユフィリアの召喚は思いのほか厳しかった。

そのユフィリアはというと、アレンの首に手を回して無邪気に笑いながら抱きついていて、アレンは困ったように笑っている。よほど気に入られたらしい。

『レーラ、俺は自分で治すから休んでいいぞ?』

『でも、兄様は身体強化で魔力を消費しているでしょう? 私は大丈夫ですから。』

ユフィリアをもう一度呼び寄せる。

ユフィリアは笑いながらアレンの側から戻った。

『兄様の傷はとても深いので、完全に治すことは私にはできませんが…。』

インクルーミス…。』

レーラの言った通り、シリウスの腕の傷は完全には治らなかった。しかし、血は止まったし、ある程度の傷を塞ぐことが出来た。なにより、魔力で痛みを抑えなくても平気だった。

深い傷はまだ痛々しいが、服で隠してしまえば怪しまれることもない。

『ユフィリア、助かったよ。』

シリウスは優しく微笑みかけた。シリウスの傷を治したユフィリアは陣に戻るとにっこりと笑った。

そして紫の光とともにユフィリアは消失した。

『レーラ、ありがとう。かなりの傷を負ったが……だが、伯爵が敵と繋がっていることは決定的だな。』

シリウスは不敵に笑う。

『ええ、物的証拠等はありませんが……。エーデルの次期当主である兄様の証言なら十分な証拠となるでしょう。』

『まあ、それはそうだろうね。』

『ああ、もうここにいる理由はない。』

シリウスはそう言った瞬間、キーラとメアリのことが過ったが、それを振り払うようにすこし首を振った。

それは考えても仕方のないことだ。シルバーパレスの貴族程ではないにせよ、なに不自由なく穏やかに暮らしていた2人。しかし、これからは反逆者の娘という立場を背負って生きていくであろう2人のことを考えると気が重かった。

シリウスはミラとレーラの会話の盗聴にも使った緑の魔法石を取り出すとアレンに渡した。

『もう殆ど魔力は残っていないが。アリアと連絡をとるくらいなら可能はずだ。』

『え…俺がするの？』

『お前が一番魔力の消費が少ない。身体強化も最低限だったようだし。これくらいなら余裕だろう？』

シリウスは呆れたようにいった。

アレンは身体強化を殆ど行わなかった。その代わり、魔剣に己の魔力を上乗せしてひたすら攻撃していたのだ。身体強化を弱めるということは防御を捨てるということだ。あのミラを相手にそんな捨て身の戦法が出来るのはこいつくらいだろう。

『わかったよ。』

アレンが軽く手を振った。すると魔法石から光が放たれ、アリアが映し出された。

『…お呼びでしょうか。シリウス様、レーラ様。アレン殿も。』

アリアは連絡が入るのを待っていたかのような態度だった。

いつものようにシンプルなデザインのメイド服を身にまとい、薄い青の艶やかな長い髪をポニーテールにしていた。透き通るような青い瞳には若干疲れが見えるが、それは仕方のないことだろう。

アリアはジェバール子爵家の次女という身分的にはアレンをも凌ぐ立場にいるが、エーデル公爵家の使用人であり、ここにいるのもジ

エバール子爵家令嬢としてではなくエーデル公爵家の使用人としてきている。したがって、使用人として与えられた部屋でノーフォーク伯爵の調査や神殿での事件の情報を調べていたのだろう。

時刻は午前4時前。いくら使用人の朝が早いといっても少々起きるのは早い時間だ。

『アリア、伯爵が敵と繋がっているのは殆ど確実だ。シルバーパレスに戻る。迎えを頼む。』

『御意。』

アリアは恭しく低頭した。

それと同時に魔法石の光が消え、アリアの映像も消えた。

『さて…俺達は情報交換でもするか…。』

シリウスはソファアーに足を組んで座った。

『レーラの所では何かわかった？』

アレンが尋ねた。

盗聴していたことは怒られそうだったのであえて言わないことにした。

『あまり収穫はありませんでした…。ただ、組織名が「レガリス」だということ。それと「シエラ」という者のことをこの国の唯一の王で最も神に近い…と。』

『うわ。何て言うか…大胆な発言だね…。』

アレンが驚いたように言った。

そもそも、この国の「神」とはこの国の建国の祖、「ラティエル」である。彼は非常に美しく、優秀な魔法使いだったらしい。当時は隣国の力が強くなっていたところで、この国の民は怯えて暮らしていた。侵略者達を止めたのは1人の美しい少年。人々はその姿に神の威光を見たという。まるで女のように整った顔立ちの少年は光と闇を自在に操り、自らの魔剣で隣国の脅威から民を救った。民は喜び、彼をこの国の王にした。

…というのがこの国の建国のおとぎ話である。今から1000年ほど前の話である。

したがって、「シエラ」を王と言うということは「神」の血をひく女王アイリーンを冒瀆するということなのだ。これだけでも不敬罪と見なされてもおかしくない。

…もともと「レガリス」は女王を神と認めていないようなので、「シエラ」を神といているのは彼らにとってはそれほど問題ではなく、むしろ当然のことなのだろうが。

『なるほどな…。』

シリウスは夢であったシエラのことを思い出した。彼女は現在の王アイリーン、そして先代の王クリスティーナのことを「王者の資格はない」といつていた。

『兄様とアレンは一緒にいたのですよね？何か情報はありましたか？』

『いや、あんまり。敵の男の子の名前が「ラスト・レガリス」だといふことと敵のリーダーの名前が「シエラ」ってことだけだよ。』

『ミラが神にもっとも近いって言っていた人ですね…。』

アレンとレーラはそろってため息をついた。

『…シエラ、ね。』

『兄様、どうかしましたか？』

『…いや、実は……』

シリウスは2人に夢で出会った少女のことについて話した。

『そんなことが…。何かロマンチック？だね。』

『そんなことが…。』

レーラは少し拗ねたような顔をした。

アレンは少し困ったような顔をシリウスに向けた。

『…どうしたんだ、レーラ。…何か…怒っているのか？』

『いいえ、別に。』

レーラは表情を一変させ、にっこりと微笑んだ。

『たとえば兄様が呆けていた理由が敵の女性と仲良くしていたただなを
てこと……少しも気にしていませんわ。』

その瞳は少しも笑っていないかったが。

『いや、レーラ！呆けていた訳じゃ……。』

『心配した私が本当に馬鹿みたい……。』

『レーラ！別に俺はシエラのことをどうも思っていない……。』

『「シエラ」ですって……？女性に疎い兄様が名前で、それも呼び捨てで呼びになるなんて……。』

どうしてだろうか。シリウスが言い訳をするほどレーラの声が冷たくなっていく気がする。

『兄様……。』

窓に霜が張り付いた。

冗談ごとではなく、部屋の空気が冷たくなってきた。

レーラの魔法が若干暴走していた。普段は炎系統の魔法を好んで使うレーラだが（攻撃力が高ため）、本当に得意な魔法は光系統と闇系統、そして氷系統なのである。

部屋の気温はおそらく外の気温（真冬である）よりもずっと低いことだろう。

（ちょっと！シリウス、さっさと謝ってよー！！）

（謝るって何をだ！？それより、レーラはなぜ名前をよぶくらいでそんなに怒っているんだ！？）

（ええいつ！何でお前はそんな所だけ無駄に鈍いんだよ！？）

シリウスとアレンは必死にテレパシーで語り合う。レーラの怒りをおさめなければ！という共通の理由があつたためいつもよりも高速で意識を共有することができた。

『覚悟はいいですか…？』

レーラの周りには冷たい空気の渦がいくつも生まれていた。その渦がテーブルに触れた瞬間、花瓶に入っていた花が凍りつき、暖かかった紅茶さえも一瞬で氷の塊となった。おそらく無意識での魔法の行使なのだろうが、無言呪文や無意識での魔法の行使は威力が弱い、というセオリーを完璧に無視した魔法だった。

『レーラ、嫉妬するのわかるけど…！！』

アレンが必死に説得しようとするが、その行為は火に油を注ぐだけだった。

レーラがシリウス（とその隣にいたアレン）に手を向けた。空気の渦が自分達に向かってくる。

（アレンッ！逃げるなッ！）

（嫌だよ！だいたい俺は悪くないし巻き添えはくらないたくないんだッ！！）

『この私が嫉妬などするわけがないでしょう!?!』

アレンは「どこがだよ!?!」と大声で叫びたいくらいだった。

『レ、レーラ!?!シリウスがシルバーパレスに戻ったら一緒に出かけてあげるって言ってるから!』

苦し紛れにいったセリフだった。

(は!?!お前は馬鹿か!?!そんなことでレーラが……)

(お前は少し黙ってろ!?!)

『え…?』

若干ではあったが、レーラの頬に赤みがさし、部屋の温度も上がったように思えた。

『な、シリウス!?!』

アレンがにっこりと微笑んでいった。

しかしその笑顔は冷や汗にまみれていたが。

『あ、ああ。』

シリウスはアレンの迫力におされて頷いた。
内心では首を捻っていたが。

『そついうことでしたら……。』

レーラがおずおずと微笑んだ。

部屋の冷気がもとにもどり、凍りついていた花と紅茶が元に戻った。
…花は萎れてしまったが。

『良かった！シリウス、ちゃんと約束は守れよ！』

アレンがシリウスの背中を思いっきり叩いた。

肝心のシリウスは目を白黒させて首を捻っていたが。

『兄様、私は新しいお洋服を選びに行きたいです！』

すっかり上機嫌となったレーラに2人は胸を撫で下ろした。

レーラの騒動からいくらかの時間がたった頃、突然ノックの音がした。

『…シリウス様。私です。』

若い女の声。アリアだ。

『準備が整いました。急いで馬車にお乗りくださいませ。』

アリアはそういつて扉をあけ、手に持っていた真っ黒で暖かいマントをシリウスに、次にレーラに、最後にアレンに掛けてくれた。

4人は裏口から外に出た。外にでると、まだ暗かったものの、もう少しで明るくなってしまっただろう。東の空の雲はすでにあけはじめ

ていた。

目の前には純白の馬車がとまっていた。2頭の馬も真っ白で美しい。エーデルの家紋こそ描かれていなかったが、その代わりに小さな青い魔法石が所々に埋め込まれているうえ、金色の不死鳥まで描かれている。…この馬車はとてつもなく目立つのではないだろうか。

『…アリア。』

『どうかなさいましたか？』

アリアは平然といった。

『…もう少しましな馬車はなかったのか？』

『…来るときに乗ってきた馬車だと余計に目立ちますし、神殿への攻撃で店はどこも閉まっていて新しい馬車を調達することが不可能でしたので。荷物を入れておく馬車でしたが…ご不快に感じられたねでしたらお詫びを申し上げます。』

アリアは顔色ひとつ変えずに言い切った。

『アリアさん、模様くらいなら魔法で変えるとか…』

『アレン殿、荷物用の馬車とはいえこれはエーデル公爵家の所有している馬車です。対魔法が厳重にかけられていて模様を変えることなんてこの短時間では不可能です。』

『そ、そうなんですか…。』

『そんなことより、お急ぎくださいませ。もうじき夜が明けてしま
いますので余計に目立ってしまいます。』

アリアはにっこりと微笑むと馬車の扉をあけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2177y/>

Sirius

2011年12月25日14時52分発行